高垣文庫所蔵貴重書
展　示　会　目　録

1991

成城大学経済研究所

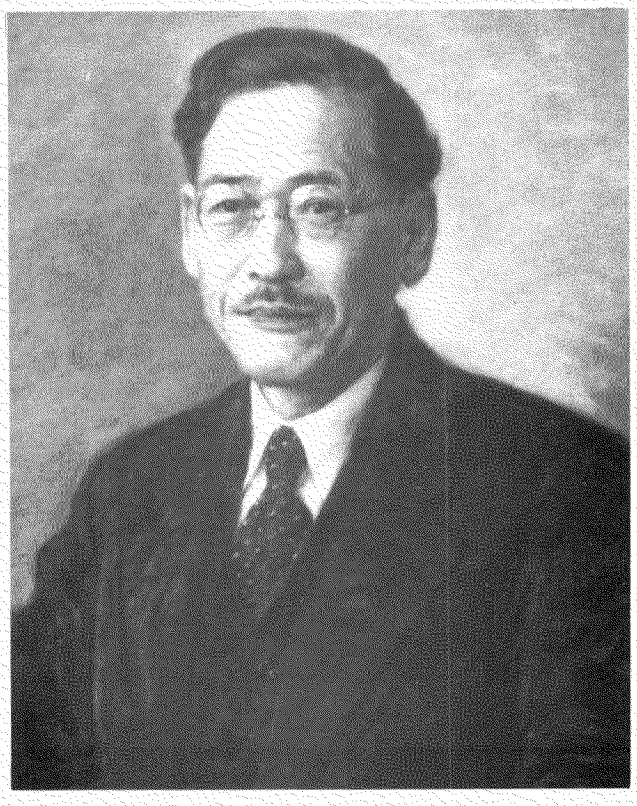
高垣文庫所蔵貴重書
展　示　会　目　録

1991

成城大学経済研究所

Old and Rare Books from Prof. Takagaki Library

——An Exhibition Catalogue——



高垣寅次郎博士肖像写真

はじめに

高垣寅次郎博士（1890-1985年）――当経済研究所発足の母体となった高垣文庫の蒐集者であり寄贈者――の生誕百周年を記念するため、われわれは1990および91の両年にわたっていくつかの事業を計画した。これらの事業の一環として、この文庫の内容を本学の学生諸君をはじめ広く世の人々に知ってもらうために、蔵書の中から1850年までに出版された欧文の書籍100点ほどを選び出し、また成城大学図書館が所蔵する関連の文献数点も借出して、併せて展示することにした。この目録はその展示をご覧くださる方々の便宜に供するために用意したものである。

博士は生前70年の長きにわたって、和洋の経済学関係の書籍の蒐集につとめて倦むことを知らなかった。蔵書の数は２万点に及ぶが、その特色は博士の次の言葉に端的に示されている。「今にして思えば、私が……一般的に著名な文献から一歩後退して、むしろ特色のある小さな文献、あるいは特色を持った時代の問題に重心を移して、選択的に特徴のある文献を集めることにしたことは、賢明なことであった。一般的な文献である限りは、経済的算段の及ぶかぎり、何時でもこれを補充し得ることであるが、かかる文献的考慮を払って蒐集したものは、今となっては再び入手することは甚だ困難であると思われる。」というのである。この展示をご覧になった方々は概ねこのことを納得して下さるのではあるまいか。

博士はこれらの本を「大変に誇りにし、大切にもしていて、ひと様に見ては戴きたいが、触っては戴きたくない」と考えていたようにも見受けられた。しかしその反面では、心ある方々の利用を期待してこれらの本を蒐集したに違いない。今われわれは、できる限り多くの方々に広くこの文献を利用して頂くことを心から希望している。

この目録では文庫の内容に従って全体を次のように４部に分け、学生諸君の理解を助けるために大部分の文献に解説を付することにした。

Ⅰ　経済思想史上の古典

Ⅱ　イギリス地金論争関連文献

Ⅲ　ジョン・ロー関連文献

Ⅳ　フランス政治経済史特殊コレクション

このうちⅡとⅢは1966年1月8日博士が宮中の講書始めにおける講演『インフレーションの歴史の一節』で取り上げた3つの論点中の2つに対応するものである。

個々の文献を掲載する順序――出版年順か、著者名順か――や解説の精粗などについてはそれぞれの担当者の判断に委ねて、あえて全体的な統一を図らなかった。

非常に貴重な蔵書をすべて無条件に、しかもきわめて丁重にご寄贈くださった高垣寅次郎博士とご家族の方々に対して、この展示を実施するにあたって改めて深甚な感謝を捧げたい。

発足以来5年目を迎えて、当研究所はようやく専用の書庫と閲覧室を持つことができたが、今後さらに前進のための努力を重ねるにあたって、諸方面からいっそうのご支援・ご鞭撻が寄せられることを切にお願いする次第である。

1991年　春

成城大学経済研究所所長

中　村　英　雄

凡　　例

Ⅰ　収録範囲

この目録は、高垣寅次郎博士の生誕百周年の記念事業の一環として開催する展示会の解題目録として、成城大学経済研究所が所蔵する高垣文庫の中から、1850年以前に刊行された洋書100点と関連文献として成城大学図書館から借出した洋書11点を収録したものである。

Ⅱ　構成と配列

目録の構成は、序文に記されているように高垣文庫の内容に従い4部に分け、各部門内の文献の配列は下記の順序とした。

Ⅰ　経済思想史上の古典　――初版の出版年順

Ⅱ　イギリス地金論争関連文献　――著者名のＡＢＣ順

Ⅲ　ジョン・ロー関連文献　――原則的には出版年順であるが、一部分、出版年に関係なく、文献の主題の関連によりまとめたものもある。

Ⅳ　フランス政治経済社会史特殊コレクション　――特に定まった順序はなく担当者の判断で配列した。

Ⅲ　記　　載

1. 各文献ごとに、まず原著の書誌的事項を目録規則の順に列記し、ついで翻訳名（著者名、書名、版次、出版地、出版年、初版の出版年）、解題の順に記載した。
2. 図書館所蔵の文献については、翻訳名のあとに〔成城大学図書館所蔵〕と付記した。
3. 主題の関連により異なる部門にも重出した文献については、解題のあとに〔○○も参照〕と付記した。

目　　次

はじめに……中村英雄……i

凡　　例……iii

展示資料

Ⅰ　経済思想史上の古典……1

Ⅱ　イギリス地金論争関連文献……29

Ⅲ　ジョン・ロー関連文献……51

Ⅳ　フランス政治経済社会史特殊コレクション……61

故高垣寅次郎博士略歴……67

編集後記……69

I　経済思想史上の古典

イギリスを中心として

1 Hales, John

A compendious or briefe examination of certayne ordinary complaints of divers of our country men in these our dayes: which although they are in some part unjust & frivolous, yet are they all by way of dialogues throughly debated & discussed. By W. S. Gentleman. London, Imprinted by T. Marshe, 1581. 55p. 19cm.

ジョン・ヘールズ『種々の人々の有する目下の不平の簡明な検討』 初版 ロンドン 1581年〔成城大学図書館所蔵〕

本書はイギリスにおける近世経済学史の劈頭を飾るものとして著名な匿名書の初版本であって、第一級の稀覯本である。執筆の時期は1549年ないしその後の十数年間とみられ、いくつかの写本および諸版本（とくにE.ラモンドの校定・編集した1893年版 A discourse of the common weal of this realm of England, ed. by E. Lamond が有名）がある。

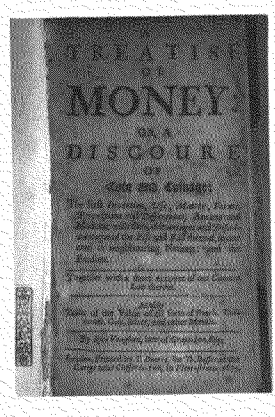
W.S. Gentleman と記された本書の著者は、今日では一般にジョン・ヘールズ（1571年没）であると推定されている。ヘールズは独学自習の人であり、1548年、イングランドの議会議員として土地囲い込みの弊害と物価騰貴とに対処するための3つの法案を提出（いずれも不成立）、また囲い込み調査委員となったが、囲い込み推進派によってうとまれ、翌年、囲い込み抑制派サマセット公の失脚により後楯を失い、大陸へ亡命、エリザベス女王の治世になってようやく帰国できた。（なお、本書はかつて文豪ウィリアム・シェイクスピアの筆になるものとみなされていた時期があったため、本学所蔵本はシェイクスピア文庫の蔵書票を有している。また、ほかに、サー・トマス・スミス［Sir Thomas Smith 1513-77］を真著者とみなす説もある。）

本書は対話篇の形をとっており、登場人物は、ナイト・農民・手工業親方・商人・博士（ドクター）の5人であり、16世紀半ばの当時のイングランド社会の各階層の関心事を5人がそれぞれ代弁して対話が進行する。話題は、宗教問題を別とすればもっぱら経済問題であり、とりわけ一般的物価騰貴、農村における囲い込み、都市の衰退を主要テーマとしている。そして鋳貨制度の改革、穀物生産の振興、製造業の育成、就業と需要との増進、貿易の促進などの対策が示されている。

こうして本書は、イングランドの封建社会の解体と初期国民経済の生成という一大転換期における根本的な経済問題を正面から取扱ったものであり、現象把握・その分析・政策提言という3部構成の論理展開と相俟って、つとに「英国経済学の濫觴」（高橋誠一郎）と称せられている。

2　Vaughan, Rice

A treatise of money: or, A discoure of coin and coinage: the first invention, use, matter, forms, proportions and differences, ancient and modern: with the advantages and disadvantages of the rise and fall thereof, in our own or neighbouring nations: and the reasons. Together with a short account of our common law therein. As also tables of the value of all sorts of pearls, diamonds, gold, silver, and other metals.　London, Printed by T. Dawks, 1675. 6 p. l., 238, [1] p. 16cm.

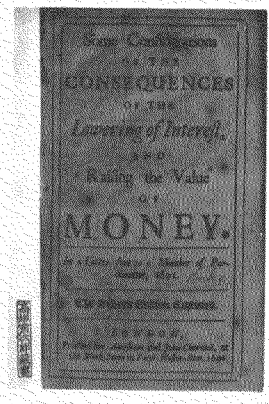


ヴォーン『貨幣論――鋳貨および貨幣鋳造にかんする一論』　初版　ロンドン　1675年

ヴォーンは17世紀半ばに活躍したウェールズ出身の弁護士・著述家で、司法・行政職についたのち、反逆罪で投獄された。本書はかれの主著で、死後、血縁者によって出版された。ヴォーンは物価騰貴の原因をスペインへの金銀の大量流入に求め、物価が貨幣数量、金と銀との比率、貨幣改鋳などによって規定される点を解明しようとした。なお、本書はのちに、マカロックの編集した重要貨幣論選集（1856年）に収録された。

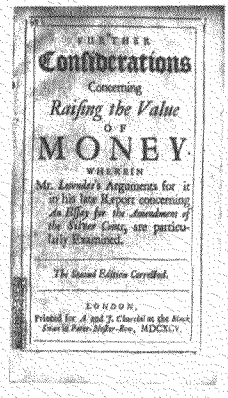
3 **[Locke, John]**

Some considerations of the consequences of the lowering of interest, and raising the value of money. In a letter sent to a member of Parliament, 1691. 2nd ed. cor. London, Printed for Awnsham and John Churchill, 1696. 192p. 17cm.


Some Considerations
OF THE
CONSEQUENCES
OF THE
Lowering of Interest,
AND
Raising the Value
OF
MONEY.
LONDON,

4 **[Locke, John]**

Further considerations concerning raising the value of money. Wherein Mr. Lowndes's arguments for it in his late Report concerning an essay for the amendment of the silver coins, are particularly examined. 2nd ed. cor. London, Printed for A. and J. Churchill, 1695. 7 p.l., 111, [1] p. 17cm.

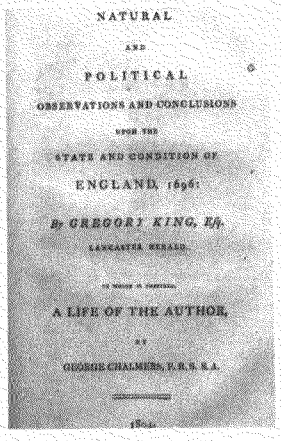

FURTHER
Considerations
Concerning
Raising the Value
OF
MONEY.
WHEREIN
Mr. Lowndes's Arguments for it in his late Report concerning An Essay for the Amendment of the Silver Coins, are particularly Examined.
The Second Edition Corrected.
LONDON,
Printed for A. and J. Churchil at the Black Swan in Pater-Noster-Row, MDCXCV.

ロック『利子引下げおよび貨幣価値引上げについて』 第2版 ロンドン 1696年（初版1692年）
ロック『貨幣価値引上げ再論』 第2版 ロンドン 1695年（初版同年）

ジョン・ロック（1632-1704）は、『人間悟性論』（1690年）によってイギリス経験論哲学の基礎を築き、『統治二論』（同年）によって名誉革命のイデオローグとなったが、他面で重商主義期の経済諸問題を論じた。とくに上掲の二著は、当時の利子論争にかかわるものである。すなわち、カルペパー父子やジョサイア・チャイルドらは、貿易上オランダに対抗するために、法定利子率を引下げて貨幣資本の供給をふやし、生産費も低下させて貿易差額の改善をめざすべきだと主張した。これに対して、ロックは、マンリーらとともに、法定利子率引下げ論は原因と結果を混同したものとして批判し、利子率は流通貨幣量によって決定され後者は貿易差額の順逆の程度によって決定されるという、チャイルドらとは逆の理論を展開した。しかしのちにマッシーが、『自然利子率論』（1750年）において、利子の源泉を利潤に求め、利子率を決定するものは流通貨幣量ではなくて資本に対する需給関係であると主張し、ロックを批判することになった。

5　King, Gregory

Natural and political observations and conclusions upon the state and condition of England, 1696: To which is prefixed, A life of the author. 1804. 2 p. l., [9]-73p. 23cm. Bound with: Chalmers, George. An estimate of the comparative strength of Great Britain... A new ed., cor. and continued to 1803.


NATURAL
AND
POLITICAL
OBSERVATIONS AND CONCLUSIONS
UPON THE
STATE AND CONDITION OF
ENGLAND, 1696:
By GREGORY KING, Esq.
LANCASTER HERALD.
TO WHICH IS PREFIXED,
A LIFE OF THE AUTHOR,
BY
GEORGE CHALMERS, F.R.S. S.A.
1804.

グレゴリ・キング『イングランドの現状の自然的・政治的観察と結論』　1696年原稿　1804年刊

イギリスの紋章官・系譜学者・測量家であったキング（1648-1712）は、のちにW.ペティらとともに政治算術家として同時代人に評価されるようになった。この『観察と結論』では、イングランドとウェールズの人口、自然的・階級的構成、所得とその分布、土地の面積と利用、地価、自然生産物、租税収入などが推計され、さらに1688年と1695年との数量比較、イングランド、フランス、オランダの国力比較が行われている。それは経済・国富・国民所得統計の先駆であり、また貴重な経済史的史料をなしている。

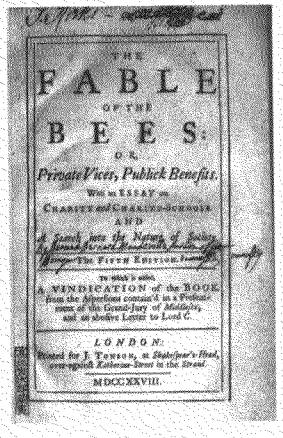
この原稿は、チャーマーズの『大ブリテンの相対的国力の推定』の付録としてはじめて印刷され、やがて1810年に独立の版として刊行された。

6　[Mandeville, Bernard de]

The fable of the bees: or, Private vices, publick benefits. With an essay on charity and charity-schools, and a search into the nature of society. To which is added, A vindication of the book from the aspersions contain'd in a presentment of the Grand-jury of Middlesex, and an abusive letter to Lord C. London, Printed for J. Tonson, 1728-1733. 2v. 21cm.

[Pt. 1]: 5th ed.; Pt. 2: 2nd ed.

Pt. 2 has imprint: London, Printed and sold by J. Roberts, 1733.


THE
FABLE
OF THE
BEES:
OR,
Private Vices, Publick Benefits.
With an ESSAY on
CHARITY and CHARITY-SCHOOLS
AND
A Search into the Nature of Society.
The FIFTH EDITION.
To which is added,
A VINDICATION of the BOOK
from the Aspersions contain'd in a Presentment of the Grand-Jury of Middlesex,
and an abusive Letter to Lord C.
LONDON:
Printed for J. TONSON, at Shakespear's Head,
over against Katharine-Street in the Strand.
MDCCXXVIII.

マンドヴィル『蜂の寓話』　ロンドン　1728-33年（初版1714年）

マンドヴィル（1670-1733）は、イギリスに帰化したオランダ生まれの開業医。本書は「利悪は公益」という副題で知られ、利己心の解放をめぐる思想史上の論争を引起こした。

マンドヴィルがこの逆説的副題によって主張しようとしたのは、利己心にもとづく私益の追求という「悪徳」が個人の経済的努力と奢侈との源泉であり、これらをつうじて社会の発展と販路および就業の確保が可能になるという点であった。それは、利己心の解放と他人の欲望への各人の対応とが分業の機構を生み出すことへの認識を示しており、アダム・スミスへの道を開拓したものであったが、正義による利己心の拘束、奢侈の社会的効用、低賃金の経済論、貿易差額説、などの重商主義期に特有の諸論点を、なおふくんでいる。

本書は1723年の版ではじめて著者名を明記し、28年に第2部を出し、33年に2巻本の新版を出している。

7 Gee, Joshua

The trade and navigation of Great-Britain considered: shewing that the surest way for a nation to increase in riches, is to prevent the importation of such foreign commodities as may be rais'd at home. That this Kingdom is capable of raising within itself, and its colonies, materials for employing all our poor in those manufactures, which we now import from such of our neighbours who refuse the admission of ours. Some account of the commodities each country we trade with takes from us, and what we take from them; with observations on the balance. 2nd ed. London, Printed by S. Buckley, 1730. 9 p. l., 147p. 21cm.

ジー『大ブリテンの貿易と海運』 第2版 ロンドン 1730年（初版1729年）

ジョシュア・ジーは18世紀前半に活躍した、重商主義期イギリスの代表的保護主義者の一人であり、チャールズ・キング編集の『イギリス商人』紙への寄稿者の一員であった。本書はイギリスの貿易差額のマイナスと、その克服策としての貿易統制とを強調している。

8 [Galiani, Ferdinando]

Della moneta, libri cinque. Napoli, Giuseppe Raimondi, 1750. 8 p. l., 370, [6] p. 22cm.

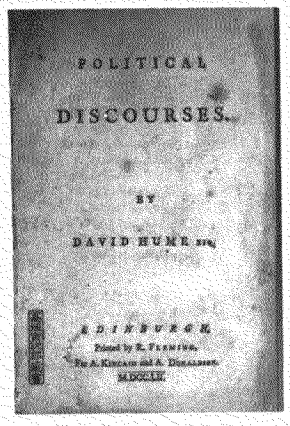
ガリアーニ『貨幣について』 初版 ナポリ 1750年

イタリアの経済学者で外交官でもあったガリアーニ（1728-87）の主著。本書は貨幣論としてより、むしろその基礎におかれた価値論によって知られる。すなわち、一方では価値を交換比率の視点からとらえて、効用と稀少性との二要因を摘出し（主観価値説）、

他方では再生産可能な財貨の価値を労働量から説明した（労働価値説）。

9　Hume, David

Political discourses.　Edinburgh, Printed by R. Fleming, for A. Kincaid and A. Donaldson, 1752. 2 p. l., 304p. 18cm.


POLITICAL
DISCOURSES.
BY
DAVID HUME esq.
EDINBURGH,
Printed by R. Fleming,
For A. Kincaid and A. Donaldson.
MDCCLII.

ヒューム『政治論集』初版　エディンバラ　1752年

本書は、政治・経済にかんする17個の論説からなり、そのうち経済にかんするものは、「商業」・「奢侈」・「貨幣」・「利子」・「貿易差額」・「租税」・「公信用」および「古代の人口」である。

ヒューム（1711-76）は本書において、(1)近代の人口増加の原理を、自由な生産者の勤労（インダストリ）と奢侈とにもとづく農工分離→生産力の発展の過程に見出し、ロバート・ウォーレスの農本的人口論を批判した。また、(2)貨幣数量説と国際間における貨幣量の自動調節機能論とを結合させて、重商主義の貿易差額説に対する批判の一根拠をつくった。さらに(3)インダストリの増大による国内市場の拡大が自由貿易体制を要請することを展望して、重商主義を批判した。

ヒュームは重商主義から自由主義への過渡期を体現しており、上記の(1)はそのごジェイムズ・ステュアートに継承され、(2)はステュアートやタッカーから批判され、(3)はスミスに継承された。

10　[Wallace, Robert]

A dissertation on the numbers of mankind in antient and modern times: in which the superior populousness of antiquity is maintained. With an appendix, containing additional observations on the same subject, and some remarks on Mr. Hume's Political discourse, of the populousness of antient nations. Edinburgh, Printed for G. Hamilton and J. Balfour, 1753. iv, 331p. 21cm.

ウォーレス『古代および近代の人口』初版　エディンバラ　1753年

ロバート・ウォーレス（1697-1771）は、スコットランド国教会の牧師であり、本書はヒュームとの論争の書である。ウォーレスは近代的工業の成長に反対し、地主の指導する農業国としての発展を意図した。

11 **[Harris, Joseph]**

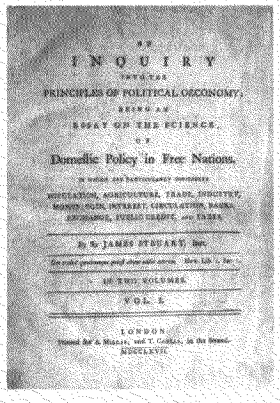
An essay upon money and coins. London, Printed: Sold by G. Hawkins, 1757-1758. 2v. in 1. 22cm. Contents.—Pt. 1: The theories of commerce, money, and exchanges.—Pt. 2: Wherein is shewed, that the established standard of money should not be violated or altered, under any pretence whatsoever.

ハリス『貨幣・鋳貨論』 初版　ロンドン　1757-58年

ジョウジフ・ハリス（1702-64）は、鍛冶工出身のイギリス人で、のちに造幣局の試金官になった。本書は、水とダイヤモンドの例によって商品の効用と交換価値とを区分し、後者を生産費に即してとらえて生産費の構成分析に道を開いた。また、社会的分業の生産力的効果を強調し、ヒュームと同様に、貨幣量の国際間自動調節論により貿易差額説を批判している。これらの論点によって、ハリスはスミスの直接の先駆者の一人と目される。

12 **Steuart, Sir James**

An inquiry into the principles of political oeconomy: being an essay on the science of domestic policy in free nations. In which are particularly considered population, agriculture, trade, industry, money, coin, interest, circulation, banks, exchange, public credit, and taxes. London, Printed for A. Millar, and T. Cadell, in the Strand, 1767. 2v. 30cm.

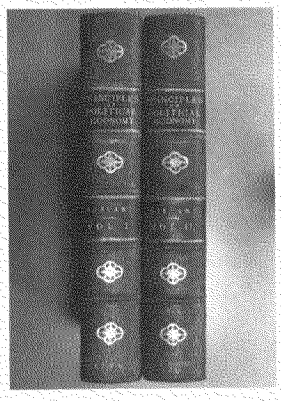

AN
INQUIRY
TOWARDS THE
PRINCIPLES OF POLITICAL OECONOMY:
BEING AN
ESSAY ON THE SCIENCE
OF
Domestic Policy in Free Nations.
IN WHICH ARE PARTICULARLY CONSIDERED
POPULATION, AGRICULTURE, TRADE, INDUSTRY,
MONEY, COIN, INTEREST, CIRCULATION, BANKS,
EXCHANGE, PUBLIC CREDIT, and TAXES.
By Sir JAMES STEUART, Bart.
IN THREE VOLUMES.
VOL. I.
LONDON:
Printed for A. Millar, and T. Cadell, in the Strand.
MDCCLXVII.

ジェイムズ・ステュアート『経済の原理』（または『経済学原理』） 初版　ロンドン　1767年

生年・没年ともアダム・スミスに10年先行したステュアート（1713-80）は、スミスと同じスコットランド人であり、法曹貴族の出自であった。本書『経済の原理』は、ジャコバイト反革命の乱（1745-46年）への加担によりヨーロッパ大陸での長期にわたる亡命生活を余儀なくされたステュアートが、モンテスキューの『法の精神』（1748年）に刺激された最初の構想以来、18年間を傾けた、文字通りのライフ・ワークであり、『国富論』に9年先立つ1767年に、ロンドンでクォート判2巻本として刊行された。1セット2ギニー（約2ポンド）で、おそらく500部刷られたと推定されるが、売行きは良くなかった。

本書は、ブリテン人としてはじめてポリティカル・エコノミーの語を書名に用いたものである。全体は5つの編――「人口と農業」、「トレードとインダストリ」、「貨幣と鋳貨」、「信用と負債」、「租税とその収入の適切な使用」――から成り、第3編までが南ドイツのテュービンゲンで、残りの2編はスコットランドのステュアート家の所領コルト

ネスで執筆された。



本書は小商品生産の――資本主義的生産の直前までの――近代西欧的展開プロセスを、理論・歴史・政策の三面から追求した大著であり、これにより、法学世界から独立した経済学の体系がはじめて成立したといってよい。ステュアートの経済学体系は、過剰生産ないし過少消費という、商品生産の内蔵する根本問題への明確な認識にもとづいた有効需要の経済学であり、貨幣的経済理論として重商主義の到達点を示すものであって、自由な商品生産社会における為政者の細心な貨幣的経済政策の必要性と有効性とを論じている。このような観点は、一般に貨幣への関心を脱落させたスミス以後の古典派経済学をこえて、系譜的にははるかにケインズにつらなるものである。

スミスは本書の吸収と克服とをめざしたが、『国富論』では、戦術的考慮から、ステュアートの名にも本書の書名にも一切言及しなかった。本書は19世紀初頭まで、経済学の体系的規準書としての評価をえたが、それにもかかわらずスミスによる「黙殺の陰謀」（マルクス）は、そのご経済学史上ステュアートを忘却ないし軽視させるのに奏功したと考えられる。

マルクスはステュアートを、本書のゆえに「ブルジョア経済学の完結した体系をつくり上げた最初のブリテン人」（『経済学批判』）と呼び、ステュアート復興を試みた。しかしこの試みの継承と発展は、今日の経済学史研究の課題として残されており、この点、近年のわが国におけるステュアート研究の深化とひろがりは注目にあたいする。

13　Steuart, Sir James

The principles of money applied to the present state of the coin of Bengal: being an inquiry into the methods to be used for correcting the defects of the present currency; for stopping the drains which carry off the coin; and for extending circulation by the means of papercredit. Composed for the use of the honourable the East-India company. [London] 1772. 91p. 24cm.

14　Steuart, Sir James

―― 2nd ed. [London] 1772. 107p. 24cm.

ジェイムズ・ステュアート『ベンガル貨幣論』　初版　ロンドン　1772年

同上　第２版　ロンドン　1772年

これは貨幣問題の専門家と目されたステュアートが、東インド会社の委嘱にこたえて

書いたものであり、同じ年のうちに第2版が出された。そのご、この『ベンガル貨幣論』は、ステュアートの『著作集』(全6巻、1805年)の第5巻に収録された。

15 Steuart, Sir James

The works, political, metaphisical, and chronological, of the late Sir James Steuart of Coltness, Bart. Now first collected by General Sir James Steuart, Bart. his son, from his father's corrected copies. To which are subjoined anecdotes of the author. London, Printed for T. Cadell and W. Davies, 1805. 6v. table. (1 fold.) 22cm.

ジェイムズ・ステュアート『著作集』(全6巻) 初版 ロンドン 1805年

本著作集は、ステュアートの一人息子・将軍ジェイムズ・ステュアート(父と同名)によって編まれたものであり、全6巻中第1～4巻は、主著『経済の原理』にあてられている。また、第5巻は、『ドイツ貨幣論』(1761年)、『ベンガル貨幣論』(1772年)など、『原理』以外の経済学的著作を収め、第6巻は、『ビーティー論』(1771年)、『ニュートン年代記の擁護』(1757年)など、哲学的・歴史的著作をふくんでいる。

ステュアートの『経済の原理』の初版は1767年に出たが、そのごダブリン版(全3巻、1770年)、バーゼル版(英語、全5巻、1796年)のほかにフランス語訳(1789-90年)、2種のドイツ語訳(ハンブルク版1769-70年、テュービンゲン版1769-72年)などが出版された。しかしステュアート自身は、初版公刊後もその改訂・増補に取り組んだ。本著作集第1～4巻を占める『原理』は、著者による初版への大幅な加筆修正をほぼ完全に吸収した決定版=『原理』第2版である。加藤一夫訳の『原理』(東京大学出版会)は、本著作集版を底本とする、世界で最初の外国語訳である(ただし全5編中第2編まで)。

なお、本著作集第6巻の末尾に付されているステュアートの伝記(中野正訳『経済学原理』、岩波文庫、第1分冊に訳載)は、ステュアートの甥バカン伯の書いたものとされていたが、今日では編者ステュアート将軍を支援したジョージ・チャーマーズによるものと推定されている。

16 Steuart, Sir James

Principles of banks and banking of money, as coin and paper: with the consequences of any excessive issue on the national currency, course of exchange, price of provisions, commodities, and fixed incomes. London, Printed by W. M'Dowall, for J. Davis, 1810. 2 p. l., 314p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 9.)

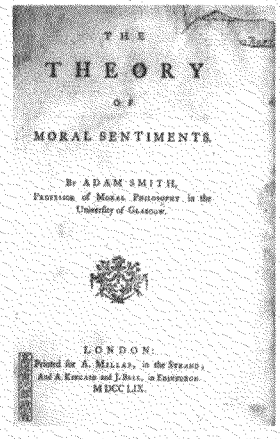
ジェイムズ・ステュアート『銀行とその貨幣業務との原理』 初版 ロンドン 1810年

これは、ステュアートの主著『経済の原理』の第3編「貨幣と鋳貨」・第4編「信用と負債」からの抜粋・要約版であり、1812年に再版された。

ステュアートの主著は、スミスにとっての恰好の目標となっただけでなく、そのご地金論争にいたるまで、貨幣・信用理論の部分を中心としてマルサス、リカード、ソーントンらによって読みつがれ、また、原始蓄積の本格的開始期にあたったアメリカでも普及した。本要約版は、19世紀初頭までのステュアートの影響力のひろがりと、経済学者ステュアートに対する当時の政論家たちの関心方向とを示唆するものである。

17　Smith, Adam

The theory of moral sentiments. London, Printed for A. Millar, 1759. 6 p. l., 551, [1] p. 21cm.


THE
THEORY
OF
MORAL SENTIMENTS.
By ADAM SMITH,
Professor of Moral Philosophy in the University of Glasgow.
LONDON:
Printed for A. Millar, in the Strand;
And A. Kincaid and J. Bell, in Edinburgh.
MDCCLIX.

アダム・スミス『道徳感情論』 初版　ロンドン 1759年

スコットランドの港町カーコールディに生まれたアダム・スミス（1723-90）は、1751年に母校グラスゴウ大学の論理学の教授に任命され、翌年、道徳哲学の講座に転じた。スミスの道徳哲学の講義内容は、自然神学、倫理学、法学および経済学から成り、本書『道徳感情論』は、このうちの倫理学の部分に相当するものであった。

スミスにおいて倫理学と社会科学とが体系づけられ、後者が前者によって基礎づけられていた点は、とくに留意を要する。スミスはのちに『国富論』で、資本主義社会の経済学的分析と経済的自由主義の主張とを展開することになったが、それに先立って本書では、近代市民社会の形成原理が探究された。すなわち、自分の幸福や利益を追求する普通の人々が、相互に冷静・公平な観察者となりあい、自分の行為に対する他人の「同感」（Sympathy）が成り立つように自己抑制を行うのであり、こうしてたとえ外的権力や利他心を欠いても同感の原理によっておのずから一定の秩序と統一が形成・維持される状態が、市民社会なのであった。

これは利己心の発展そのものが社会的統一をつくり出すことへの洞察であり、すでに市民社会の科学的認識を示すものであって、ホッブズ以降のイギリス近代自然法思想における心理分析的人間学の営為の結実であった。また、科学的認識が可能になるほどに、イギリスの現実の社会がすでに自律化するにいたっていたのだといってもよい。

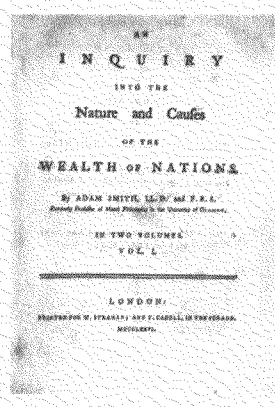
スミスが把握した市民社会は、見知らぬ人々のあいだで「同感」が成立しうるような、基本的に等質な個人から成る社会であったが、この交換社会は、のちに『国富論』では「商業的社会」としてとらえなおされ、生産力の発展および資本主義的蓄積の分析というかたちで経済学の体系が、道徳哲学の中から分出されることとなる。

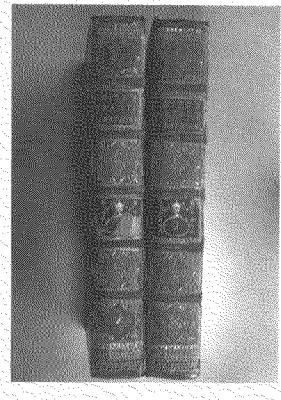
『道徳感情論』は好評を博してスミスの名声を確立し、版を重ねて、スミス生存中に

第6版（1790年）まで出た。第3版（1769年）では「言語起源論」が加えられ、第6版では大幅な増訂が行われている。

18 Smith, Adam

An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. London, Printed for W. Strahan; and T. Cadell, in the Strand, 1776. 2v. 27cm.


AN
INQUIRY
INTO THE
Nature and Causes
OF THE
WEALTH OF NATIONS.
By ADAM SMITH, LL.D. and F.R.S.
Formerly Professor of Moral Philosophy in the University of Glasgow.
IN TWO VOLUMES.
VOL. I.
LONDON:
PRINTED FOR W. STRAHAN; AND T. CADELL, IN THE STRAND.
MDCCLXXVI.



アダム・スミス『国富論』 初版 ロンドン 1776年

スミスの主著の一つ『国富論』（『諸国民の富の本質と諸原因とにかんする一研究』）は、1776年3月、すなわちアメリカ独立宣言のおよそ4カ月前に、ロンドンで2巻本として出版された。それは資本主義社会の最初の包括的な分析であり、資本主義社会の科学としての経済学の、最初の体系であった。

スミスは『道徳感情論』刊行ののち、1764年にはグラスゴウ大学の教授職を辞して青年公爵バックルー公の家庭教師としてフランスを旅行した（1764年2月～66年10月）。このときスミスは、親友ヒュームの紹介もあってパリ社交界に入り、ケネー、テュルゴら当時のフランス思想界の中心人物たちと親しく交わった。1766年11月に帰国したスミスは、翌年故郷カーコールディに戻り、いよいよ『国富論』の執筆に没頭、1773年春にはロンドンに移り、さらに3年間研究・執筆をつづけた。

『国富論』初版は、ジェイムズ・ステュアートの『経済の原理』と同じ判型で同じ出版社から刊行され、売価は1セット1ポンド16シリングであった。『国富論』は、経験に即した具体的叙述と、それを見通す広い理論的視野とのゆえに、各方面で好評裡に迎えられ、初版は半年で売り切れた。そのごスミスの生前に第5版（1789年）まで出た。

ステュアートの『経済の原理』初版は、フランスから帰国してロンドンに滞在中のスミスの眼前に出現し、後者がカーコールディに戻ろうとしていた頃に、『原理』の書評がいくつか現われていた。スミスは『国富論』では『原理』に一切言及していないが、『国富論』執筆にさいして『原理』の吸収と克服とをみずからの重要な課題とみなしていた

と考えられる。

『原理』と同様、『国富論』も5編から成るが、前者が単純商品生産の展開過程（農工分離）に立脚した、人口論からはじまる体系であったのに対して、後者は、産業資本の自律的成長を展望した、交換価値の分析からはじまる体系なのであり、スミス以降、その発想とスタイルとにおいて、経済学の主流が形成されることになった。

『国富論』の最初の2編は、価値論と資本蓄積論とを基軸とする、資本主義社会の理論的構造分析にあてられ、第3編は富裕化の自然史を展望し、第4編ではこの自然史をゆがめた政策として、とくに重商主義が徹底的に批判され、第5編は国家活動の範囲（財政）を論じている。

スミスは市民社会の富裕化の原因を、分業による労働生産力の増大に求め、資本の蓄積を生産力発達の前提として把握した。したがって、一方で労働生産力の増加は資本家の利潤の増加だけでなく労働者をふくむ社会の全成員の生活水準の向上をもたらすと考えられ（自律的・調和的に発展する資本主義社会像）、他方では、資本蓄積の自然的経路の尊重を説く経済的自由主義の主張と、干渉排除の要求（重商主義批判）とが、『国富論』の政策論的帰結として提起される。

こうして『国富論』は、新しい経済社会の到来と、経済学の新次元の成立とを告げる古典となった。しかし同時に、この古典は、重商主義の政策体系がイギリス資本主義の形成に対して果たした歴史的役割を無視し、ステュアートらの開拓した貨幣的経済理論の諸成果をほとんど継承しえずにこれを放擲するという負の面をあわせもっていた点にも、注意が向けられるべきであろう。

19　Smith, Adam

Essays on philosophical subjects. To which is prefixed, an account of the life and writings of the author, by Dugald Stewart. Dublin, Printed for Messrs, Wogan, Byrne, J. Moore, Colbert, Rice, W. Jones, Porter, and Folingsby, 1795. cxxiii, 332p. 22cm.

アダム・スミス『哲学論文集』ダブリン　1795年

スミスは晩年に、旧友のジョウジフ・ブラックとジェイムズ・ハットンとを遺言執行人に指名し、大部分の未定稿の焼却を依頼して、1790年7月17日に死去した。そのご両名は、焼却をまぬがれた天文学史、芸術の模倣論にかんする原稿をまとめ、デュガルド・ステュアートによるスミスの伝記と批評を収録して、1795年に『哲学論文集』として出版した。本書は、ロンドン版（1795年）とは別に出たダブリン版（同年）である。ほかにバーゼル版（1799年）、ストラスブール版（1799年）などがある。

20 Benthan, Jeremy

Defence of usury; shewing the impolicy of the present legal restraints on the terms of pecuniary bargains; in letters to a friend. To which is added, A letter to Adam Smith, Esq. LL. D. on the discouragements opposed by the above restraints to the progress of inventive industry. 3rd ed. And to which is also added, 2nd ed., A protest against law taxes. London, Printed for Payne and Foss, 1816. 4 p. l., 206, 70p. 20cm.

ベンサム『高利擁護論』 第3版 ロンドン 1816年（初版1787年）

イギリス功利主義の確立者ベンサム（1748-1832）は、『国富論』を熟読してスミスを尊敬した。1786年から翌年にかけてロシアに滞在したベンサムは、その間に『報酬論』、パノプティコン書簡につづいて『高利擁護論』を書き、これは1787年の暮にロンドンで刊行された。本書の執筆は、ピットが法定利子率を下げる考えだという噂に触発されて着手された。ベンサムは、高利は犯罪ではなく、利子も自由であるべきだと説き、利子の法定を容認したスミスを批判して、利子率法定は創意と技術革新との障害になると主張している。

21 Bentham, Jeremy

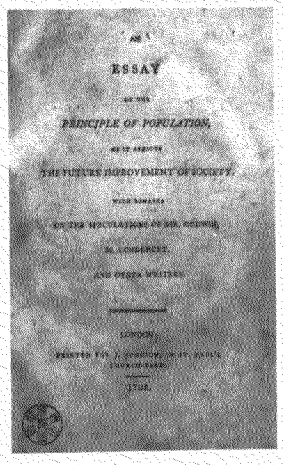
An introduction to the principles of morals and legislation. A new ed., cor. by the author. London, Printed for W. Pickering, 1823. 2v. front. (port.) 22cm.

ベンサム『道徳および立法の原理序説』 第2版 ロンドン 1823年（初版1789年）

ベンサムの84年の生涯は、立法の科学の建設というライト・モチーフによって貫かれている。功利の原理または最大幸福原理を、道徳のみならずとりわけ統治の原理として位置づけるベンサムの不変の基本観点は、すでに処女作『統治論断片』（1776年）で提示されたが、おびただしいベンサムの著作の中で主著として最も有名なのは、この『道徳および立法の原理序説』（1780年印刷、1789年刊行、1823年再版）だといってよい。最大多数の最大幸福の原理にもとづく立法改革というベンサムの実践的思想の作用力は、1832年の第1次選挙法改正の促進などの同時代的局面にとどまるものではなく、その射程は、個人の自由と国家干渉との関係をめぐるすぐれて今日的な課題にまで及んでいる。

22 〔Malthus, Thomas Robert〕

An essay on the principle of population, as it affects the future improvement of society. With remarks on the speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and other writers. London, Printed for J. Johnson, 1798. ix, 396p. 23cm.


ESSAY
ON THE
PRINCIPLE OF POPULATION,
AS IT AFFECTS
THE FUTURE IMPROVEMENT OF SOCIETY.

マルサス『人口論』（または『人口の原理』）初版　ロンドン　1798年〔成城大学図書館所蔵〕

イギリス古典派経済学の発展史をリカードと並んで支えたマルサス（1766-1834）は、ケンブリッジ大学卒業後僧職についたが、やがて1805年に開校した東インド・カレジの近代史および経済学の教授となった。

マルサスが名声を確立したのは、本書『人口論』によってであり、その初版は匿名で刊行され、第2版（1803年）以降では、初版の時論的通俗性の克服と超体制的人口原理の樹立がめざされた。本書は、人口と食物との増加率にかんする有名な論点に拠り、現実の貧困と罪悪を必然的なものとみなした。このような見地は、過剰人口の発生を自然法則に解消するものであり、他方、マルサスが第2版で、人口増加に対する労働者の自発的道徳的抑制の議論を導入したことは、かえって、貧困を労働者自身の道徳的責任に転嫁するものであったから、のちにマルクスの批判を浴びることになった。

23 Thornton, Henry

An enquiry into the nature and effects of the paper credit of Great Britain. London, Printed for J. Hatchard, 1802. xii, [13]-320p. 22cm.

ヘンリー・ソーントン『紙券信用論』初版　ロンドン　1802年

ヘンリー・ソーントン（1760-1815）はイギリスの銀行家で、地金論争における初期の理論家。本書は、金兌換の停止が直ちに不換銀行券の価値下落をもたらすわけではないが、不換銀行券の無制限の増発は物価騰貴や為替下落を引起こすと説いて、1810年代の地金論争や40年代の通貨論争に影響を与えた。［Ⅱ32も参照］

24 Say, Jean Baptiste

Traité d'économie politique, ou Simple exposition de la manière dont se forment, se distribuent et se consomment les richesses ; 4. éd., cor. et augm., à laquelle se trouve joint un épitome des principes fondamentaux de l'économie politique. Paris, Chez Deterville, 1819. 2v. 21cm.

セー『経済学概論』 第4版 パリ 1819年（初版1803年）

本書はフランスにおける代表的なスミス継承者セー（1767-1832）の主著であり、生前に5版を数え、生産・分配・消費の三分法によってスミスの経済学説を大陸に普及させた。ただし、セーはスミスの労働価値説を継承せず、効用を価値の源泉とみなして需要供給価値説を採用した。また、本書は販路の法則（セー法則）の提唱によって、資本制生産の全般的「調和」を弁護することになった。

25 Lauderdale, James Maitland, 8th earl of

An inquiry into the nature and origin of public wealth, and into the means and causes of its increase. By the Earl of Lauderdale. Edinburgh, Printed for A. Constable, 1804. 5 p. l., 482p. tables (1 fold.) 22cm.

ローダーデール『公共の富の性質と起源およびその増加の手段と原因とにかんする研究』 初版 エディンバラ 1804年

スミスの『国富論』を批判したイギリスの政治家・経済学者ローダーデール（1759-1839）の主著。私富と公富との区別、節約（→消費削減）による過剰生産、などの論点をふくみ、後代に評価されるようになった。

26 Spence, William

Britain independent of commerce ; or, Proofs, deduced from an investigation into the true causes of the wealth of nations, that our riches, prosperity, and power, are derived from sources inherent in ourselves, and would not be affected, even though our commerce were annihilated. 3rd ed. London, Printed by W. Savage, for T. Cadell nad W. Davies, 1808. 96p. 21cm.

ウィリアム・スペンス『商業に依存せざる英国』 第3版 ロンドン 1808年（初版1807年）

スペンス（1783-1860）はイギリスにおける重農学派の代表者の一人であり、コベットやチャーマーズらとともに農業重視を唱えて、J.ミルやトレンズと論争した。ナポレオン戦争中の大陸封鎖を背景として生まれた本書は、外国貿易を不要視し、重農主義を鼓舞した。

27 Ricardo, David

The high price of bullion, a proof of the depreciation of bank notes. 3rd ed., with additions. London, Printed by Harding & Wright, for J. Murray, 1810. iv, 56p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 8.)

リカード『地金の高価』 第3版 ロンドン 1810年（初版同年）

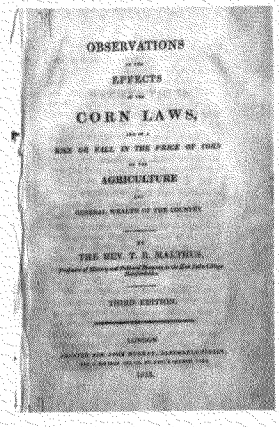
イギリス古典派経済学の完成者リカード（1772-1823）は、ユダヤ系の株式仲買人の子

に生まれ、やがて父と同種の職業を営んで成功した。

ナポレオン戦争によるイングランド銀行の兌換停止（1797年）ののち、1808年以降イギリスでは不換銀行券の減価と地金の騰貴、さらに物価の騰貴と為替の下落が生じた。この原因と対策をめぐって地金論争が発生し、リカードは、まず1809年に新聞寄稿論説「金の価格」によってデビューした。ついで翌年、かれは本パンフレット『地金の高価』で、一国の通貨が不換銀行券から成るばあい、その過剰発行は貨幣価値を下落させるから、イングランド銀行は銀行券の発行額を制限せよ、と主張した。このパンフレットは、イングランド銀行理事ボゥズンキットによって批判されたので、リカードは翌1811年に反論した。〔Ⅱ23，Ⅱ5，Ⅱ26も参照〕

28　Malthus, Thomas Robert

Observations on the effects of the corn laws, and of a rise or fall in the price of corn on the agriculture and general wealth of the country. 3rd ed. London, Printed for John Murray, 1815. 1 p. l., 47p. 22cm.

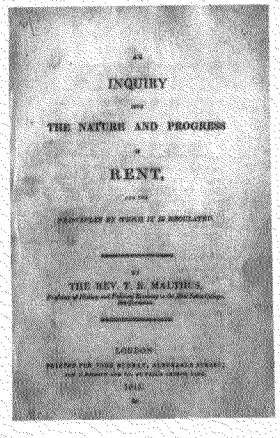

OBSERVATIONS
ON THE
EFFECTS
OF THE
CORN LAWS,
AND OF A
RISE OR FALL IN THE PRICE OF CORN
ON THE
AGRICULTURE
AND
GENERAL WEALTH OF THE COUNTRY.
BY
THE REV. T. R. MALTHUS,
THIRD EDITION.
LONDON:
1815.

マルサス『穀物法の効果にかんする観察』第3版　ロンドン　1815年（初版1814年）

穀物法論争期（1813-15年）におけるマルサスの3つのパンフレットの中の第1のもの。ここでは、マルサスは穀物法制定に対する賛否両論の検討にさいして、第三者的立場を装っている。

29　Malthus, Thomas Robert

An inquiry into the nature and progress of rent, and the principles by which it is regulated. London, Printed for John Murray, 1815. 2 p. l., 61p. 21cm.


AN
INQUIRY
INTO
THE NATURE AND PROGRESS
OF
RENT,
AND THE
PRINCIPLES BY WHICH IT IS REGULATED.
BY
THE REV. T. R. MALTHUS,
LONDON:
1815.

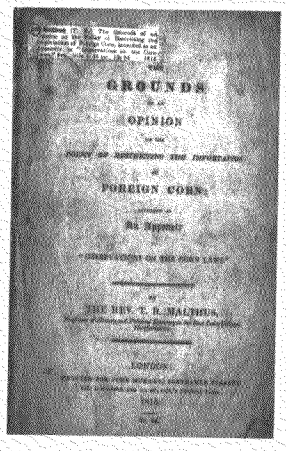
マルサス『地代の性質および増進』初版　ロンドン　1815年

穀物法論争期のマルサスの第2パンフレット。これは穀物法論議の基礎となるべき地代理論を展開したもので、マルサスは地代の原因として、(1)剰余をつくり出す土地の性質、(2)生活必需品としての土地生産物への需要の創造、(3)肥沃地の稀少性、を挙げ、(3)のみを強調するリカードと対立し

た。

30 Malthus, Thomas Robert

The grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn: intended as an appendix to "Observations on the corn laws." London, Printed for John Murray, 1815. 1 p. l., 48p. 21cm.

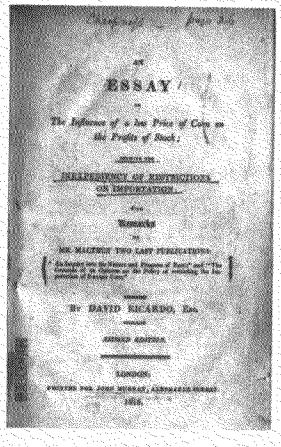


マルサス『外国穀物輸入制限政策にかんする意見の根拠』 初版　ロンドン　1815年

穀物法にかんするマルサスの第3パンフレット。これは第1パンフレットの付録と名づけられており、リカードに反対して穀物法賛成論を展開している。

31 Ricardo, David

An essay on the influence of a low price of corn on the profits of stock; shewing the inexpediency of restrictions on importation; with remarks on Mr. Malthus' two last publications: "An inquiry into the nature and progress of rent"; and "The grounds of an opinion on the policy of restricting the importation of foreign corn." 2nd ed. London, Printed for John Murray, 1815. 2 p. l., 50p. 22cm.



リカード『低廉な穀価が資本の利潤に及ぼす影響についての一論』 第2版　ロンドン　1815年（初版同年）

穀物法論争期に、リカードが論敵マルサスの2つのパンフレット『地代の性質および増進』と『外国穀物輸入制限政策にかんする意見の根拠』とを批判して、穀物法反対の立場を打出したもの。その骨子は、穀物の輸入制限は穀価騰貴→賃金騰貴により利潤減少と地代増加とをもたらすから、地主階級の利害は産業資本家階級（および労働者階級）の利害と対立する、という点にあった。本パンフレットは、リカードが自分の地代論や価値論を形成してゆくうえでの重要な契機となったことでも知られている。

32　Torrens, Robert

An essay on the external corn trade. 3rd ed.　London, Printed for Longman, Rees, Orme, Brown, and Green, 1826. xxiv, 416p. 24cm.

トレンズ『外国穀物貿易論』　第3版　ロンドン　1826年（初版1815年）

トレンズ（1780-1864）は軍人あがりの経済学者で、リカード、J.ミルらと「経済学クラブ」を創設した（1821年）のち、下院議員となり、南オーストラリアの植民活動や通貨問題などについて論じた。

本書は、『富の生産』（1821年）とともにトレンズの経済理論上の主要著作であり、差額地代論、賃金生存費説、比較生産費説などをふくんでいる。これらの論点はリカードと同説であるが、トレンズは価値論においては、資本主義社会での労働価値説の妥当性を否定してスミス段階に逆戻りし、また、利潤の源泉を流通過程に求めた。後代のトレンズ再評価の動きは、E.セリグマンやL.ロビンズによるところが大きい。

33　[West, Sir Edward]

Essay on the application of capital to land, with observations shewing the impolicy of any great restriction of the importation of corn, and that the bounty of 1688 did not lower the price of it. By a fellow of University College, Oxford. London, Printed for T. Underwood, 1815. 1 p. l., 69p. 21cm.

ウェスト『資本の土地への適用にかんする試論』　初版　ロンドン　1815年

イギリスの判事で経済学者でもあったエドワド・ウェスト（1782-1828）が、穀物法反対を主張するために匿名で出版したパンフレット。この中でウェストは、マルサス、リカードらと並んで収穫逓減法則の最初の定式化を行っている。

34　Ricardo, David

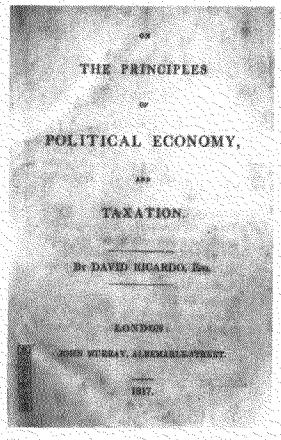
Proposals for an economical and secure currency; with observations on the profits of the Bank of England, as they regard the public and the proprietors of bank stock.　London, Printed for John Murray, 1816. 126p. 22cm.

リカード『経済的でしかも安定的な通貨のための提案』　初版　ロンドン　1816年

リカードが、ナポレオン戦争後の兌換再開に備えて金地金本位制度の諸提案を行ったもの。〔Ⅱ25も参照〕

35 Ricardo, David

On the principles of political economy, and taxation. London, John Murray, 1817. viii, 589, [14] p. 22cm.

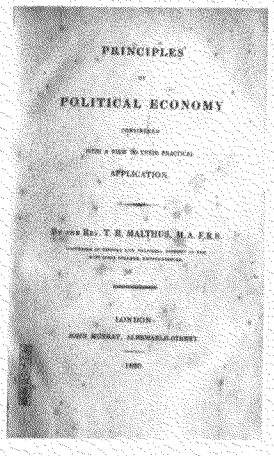

ON
THE PRINCIPLES
OF
POLITICAL ECONOMY,
AND
TAXATION.
By DAVID RICARDO, Esq.
LONDON:
JOHN MURRAY, ALBEMARLE-STREET.
1817.

リカード『経済学および課税の原理』 初版 ロンドン 1817年

本書はリカードの主著であると同時に、古典派経済学の最奥の到達点を示すものである。全体は内容上、経済学の原理、租税論、補論的・論争的部分の3つに分けられるが、本書の中核は第1の部分（最初の7章）にある。そこでは投下労働価値説にもとづいて、地主階級の地代・労働者階級の賃金・産業資本家階級の利潤の三階級三分配分論が展開されている。また、本書は差額地代論、生存費賃金説、賃金・利潤の相反関係論、全般的過剰生産否定論、機械論における排除説（第3版、1821年）、などの論点をふくむ。

36 Malthus, Thomas Robert

Principles of political economy considered with a view to their practical application. London, John Murray, 1820. vi, 601p. 23cm.


PRINCIPLES
OF
POLITICAL ECONOMY
CONSIDERED
WITH A VIEW TO THEIR PRACTICAL
APPLICATION.
By the Rev. T. R. MALTHUS, M.A. F.R.S.
LONDON:
JOHN MURRAY, ALBEMARLE-STREET.
1820.

マルサス『経済学原理』 初版 ロンドン 1820年

マルサスの経済学上の主著であり、産業資本家階級の立場に立つリカードの価値論・三分配分論・蓄積論を、地主階級の立場から批判している。すなわち、価値論における支配労働価値説（尺度論）および需給説（決定論）、地代論における土地生産力説、賃金論における需給説および萌芽的な賃金基金説、賃金・利潤の並行関係説、過少消費論および有効需要論、などを理論的特徴としている。

37 Say, Jean Baptiste

Lettres à M. Malthus, sur différens sujets d'économie politique, notamment sur les causes de la stagnation générale du commerce. Paris, Chez Bossange, 1820. 4 p. l., 184p. 22cm.

セー『マルサス氏への書簡』 初版　パリ　1820年

本書は、セーが、シスモンディやマルサスの過少消費説的な全般的恐慌論に対して「販路の理論」をもって反駁したものであり、過剰はつねに部分的に起こるにすぎないと主張している。

38　Mill, James

Elements of political economy. 3rd ed., rev. and cor.　London, Henry G. Bohn, 1844. viii, 304p. 23cm.

ジェイムズ・ミル『経済学要綱』 第3版の改訂版　ロンドン　1844年（初版1821年）

リカードの直弟子であった父ミル（1773-1836）が、リカードの主著『経済学および課税の原理』に対する普及版として書いたもので、イギリスの経済学において最初の四分法（生産・分配・流通・消費）を採用した。

39　Ricardo, David

On protection to agriculture. 4th ed.　London, John Murray, 1822. 2 p. l., 95p. fold. table. 24cm.

リカード『農業保護について』 第4版　ロンドン　1822年（初版同年）

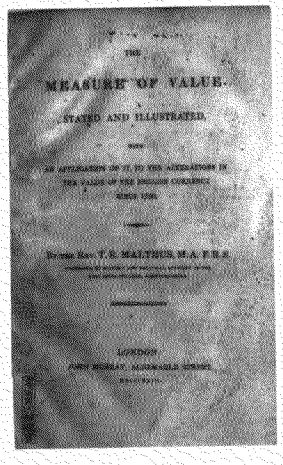
1815年の穀物法成立後の農業不況委員会の委員の一人であったリカードの、少数意見としてのパンフレット。多数意見の農業委員会『報告』は、穀物輸入制限の強化を打出したが、リカードは逆に穀物自由貿易への漸次的移行策を提唱した。

40　Malthus, Thomas Robert

The measure of value stated and illustrated, with an application of it to the alterations in the value of the English currency since 1790. London, John Murray, 1823. v, 81p. 22cm.

マルサス『価値尺度論』 初版　ロンドン　1823年

マルサスは『経済学原理』（初版、1820年）で、価値尺度を「穀物と労働との中項」に求めたが、本書では、支配労働尺度論の徹底化をめざした。


THE
MEASURE OF VALUE,
STATED AND ILLUSTRATED,
LONDON

41 Tooke, Thomas

Thoughts and details on the high and low prices of the last thirty years. London, John Murray, 1823. 2v. tables. 23cm. Contents.—Pt. 1: On the alterations in the currency.—Pt. 2: On the effect of war.—Pt. 3: On the effect of the seasons.—Pt. 4: A table of the prices of various commodities, from 1782 to 1822, with statements of quantities; preceded by some general remarks.

トゥック『過去30年の物価』 初版 ロンドン 1823年

トマス・トゥック（1774-1858）はロシア生まれのイギリスの実業家・経済学者で、自由貿易論を主張し、1821年の「経済学クラブ」設立に参加、のちに通貨論争における銀行学派の代表的論客となった。本書は主著『物価史』（1838-57年）に先立つ実証的研究であり、銀行主義の理論をあみ出す前の段階に属するものである。

42 [Bailey, Samuel]

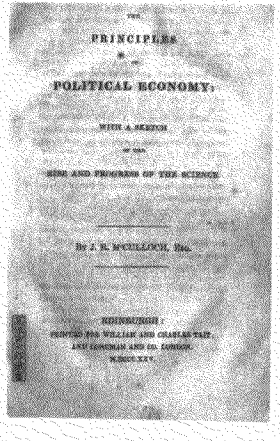
A critical dissertation on the nature, measures, and causes of value; chiefly in reference to the writings of Mr. Ricardo and his followers. By the author of Essays on the formation and publication of opinions, &c. &c. London, Printed for R. Hunter, 1825. xxviii, 255p. 20cm.

ベイリー『リカード価値論への批判』 初版 ロンドン 1825年

イギリスの哲学者・経済学者サミュエル・ベイリー（1791-1870）の、リカードおよびその追随者に対する匿名の批判書。ここには、労働価値説への批判、価値の一要素としての時間の重視、地代（レント）概念の拡張、労働生産性と賃金との関係など、近代理論的諸要素がふくまれている。のちのベイリー復興と再評価には、E.セリグマンが貢献した。

43 McCulloch, John Ramsay

The principles of political economy: with a sketch of the rise and progress of the science. By J. R. M'Culloch. Edinburgh, Printed for William and Charles Tait, 1825. x, 423p. 24cm.


THE
PRINCIPLES
OF
POLITICAL ECONOMY;
WITH A SKETCH
OF THE
RISE AND PROGRESS OF THE SCIENCE.
By J. R. M'CULLOCH, Esq.
EDINBURGH:
PRINTED FOR WILLIAM AND CHARLES TAIT,
AND LONGMAN AND CO. LONDON.
M.DCC.XXV.

マカロック『経済学原理』 初版 エディンバラ 1825年

マカロック（1789-1864）は、J.ミルと同様スコットランド出身で、リカード理論の普及に努め、1828-37年ロンドン大学の経済学教授、38年以降は王室印刷局の監督官であった。本書は古典学派

の代表的著作の一つとしてよく売れたが、労働概念を動物・機械・自然力による作用にまで拡張解釈し、実質的にはリカードの労働価値論の解体に手を借すことになった。

44　Malthus, Thomas Robert

Definitions in political economy, preceded by an inquiry into the rules which ought to guide political economists in the definition and use of their terms; with remarks on the deviation from these rules in their writings. London, John Murray, 1827. viii, 261p. 21cm.

マルサス『経済学における諸定義』　ロンドン　1827年（初版1826年）

マルサスが経済学上の術語の正しい定義づけを試みようとしたもので、重農学派、スミス、セー、リカード、J.ミル、マカロック、ベイリーらが批判されている。

45　Chalmers, Thomas

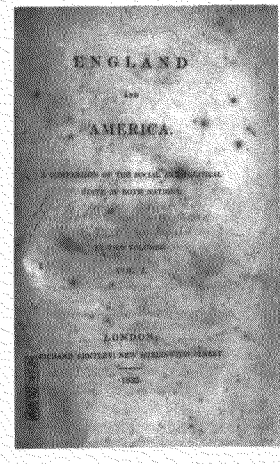
On political economy, in connexion with the moral state and moral prospects of society. 2nd ed. Glasgow, Printed for William Collins, 1832. viii, 566p. 23cm.

チャーマーズ『経済学について』　第2版　グラスゴウ　1832年（初版同年）

スコットランドの牧師で経済学者でもあったチャーマーズ（1780-1847）が、地主階級の立場からマルサスの人口理論・経済理論に依拠しつつ、重農主義的議論を展開したもの。

46　[Wakefield, Edward Gibbon]

England and America. A comparison of the social and political state of both nations. London, Richard Bentley, 1833. 2v. in 1. 23cm.



ウェイクフィールド『イギリスとアメリカ』　初版　ロンドン　1833年

ウェイクフィールド（1796-1862）はイギリスの組織的植民論の先駆者であり、ベンサム、J.S.ミル、トレンズらの支持をえて、南オーストラリア、ニュージーランド、カナダの植民政策の改善に貢献した。かれの主著である本書は、イギリスの過剰資本と過剰労働とを植民地に移すことによってのみ、本国の沈滞と労資対立とを克服できると説き、イギリス資本主義の新段階への対応を示している。

47 Rae, John

Statement of some new principles on the subject of political economy, exposing the fallacies of the system of free trade, and of some other doctrines maintained in the "Wealth of nations." Boston, Hilliard, Gray, 1834. xvi, 414p. 26cm.

レー『経済学新原理』 初版 ボストン 1834年

ジョン・レー（1796-1872）はスコットランドに生まれ、カナダに渡り、アメリカに移住して、国民主義的な「アメリカ体制」派経済学者の一人として活躍した。本書はスミスを批判して、保護貿易による国民的生産力の育成の必要を説き、また、資本利子論における時差説の先駆となった。

48 Ramsay, Sir George

An essay on the distribution of wealth. Edinburgh, Adam and Charles Black, 1836. xiii, [11]-506p. 22cm.

ラムジー『富の分配にかんする一論』 初版 エディンバラ 1836年

ラムジー（1800-71）はスコットランドの哲学者・経済学者で、地主階級の立場に立って穀物法に賛成し、リカードを批判した。経済学史上の本書の貢献は、不変資本・可変資本の区分、資本の有機的構成の高度化の理論、利子と企業家利潤（資本家と企業家）との区別、賃金前払説の否定、などの諸論点に求められる。

49 Wayland, Francis

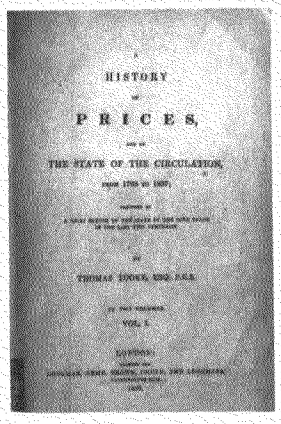
The elements of political economy. Boston, Gould, Kendall, and Lincoln, 1843. xii, 406p. 20cm.

ウェイランド『経済学要論』 ボストン 1843年（初版1837年）

ウェイランド（1796-1865）はアメリカの教育家・哲学者で、長くブラウン大学の学長をつとめた。このかん、かれは教科書として『経済学要論』を書き、それは1837年の初版から1906年まで60種以上の版本を数えた。1867年に渡米した福沢諭吉がこの本を大量に購入し、慶應義塾の学生のテキストに用いたことから、ウェイランドは日本への経済学導入史上にその名を残すことになった。本書はJ.ミル、マカロック、リカードなど古典学派に依拠しつつ、「アメリカ体制」派の議論をも採り入れている。

50　Tooke, Thomas

A history of prices, and of the state of the circulation, from 1793 to 1837; preceded by a brief sketch of the state of the corn trade in the last two centuries. London, Longman, Orme, Brown, Green, and Longmans, 1838. 2v. tables. 23cm.


A
HISTORY
OF
PRICES,
AND OF
THE STATE OF THE CIRCULATION,
FROM 1793 TO 1837;
PRECEDED BY
A BRIEF SKETCH OF THE STATE OF THE CORN TRADE
IN THE LAST TWO CENTURIES.
BY
THOMAS TOOKE, ESQ. F.R.S.
IN TWO VOLUMES.
VOL. I.
LONDON:
PRINTED BY
SPOTTISWOODE AND SHAW, NEW-STREET SQUARE,
FOR LONGMAN, ORME, BROWN, GREEN, AND LONGMANS,
PATERNOSTER ROW.
1838.

トゥック『物価史』　第1～2巻　初版　ロンドン　1838年

全6巻のうち、第1～2巻は1838年、第3巻は40年、第4巻は48年に出版され、第5～6巻はニューマーチとの共著として1857年に出版された。トゥックは物価史にかんする精細な実証的分析により、物価の騰落が流通貨幣量の増減の原因であってその逆ではないとして、通貨主義を批判し、銀行主義の代表的学説を確立した。

51　Senior, Nassau William

Three lectures on the value of money, delivered before the University of Oxford, in 1829. London, B. Fellowes, 1840. 84p. 22cm. At head of title: [Unpublished]

シーニョア『貨幣価値にかんする三講』　初版　ロンドン　1840年

ナソウ・シーニョア（1790-1864）は、1825年にオックスフォード大学の初代の経済学教授に就任、そのご勅命救貧法委員会のメンバーとなり、ベンサムの弟子チャドウィックとともに報告書を作成し、抑止的原理で貫かれた1834年の新救貧法の産婆役をはたした。本書は、1829年にオックスフォード大学で行われた講義の大部分を私家本として印刷したものであり、古典学派の貨幣数量説的見地には立たず、貨幣価値を地金の価値に求めている。

52　Roscher, Wilhelm Georg Friedrich

Grundriß zu Vorlesungen über die Staatswirthschaft. Nach geschichtlicher Methode. Göttingen, Dieterich, 1843. vi, 150p. 22cm.

ロッシャー『国家経済学要綱』　初版　ゲッティンゲン　1843年

ヴィルヘルム・ロッシャー（1817-94）は、B.ヒルデブラント、K.クニースとともにドイツ歴史学派の創設者の一人であり、ハノーヴァーに生まれ、ゲッティンゲン、ライプツィヒの各大学で歴史学・国家経済学を講じた。本書の序文は歴史学派の独立宣言ともいうべきもので、経済学は国民経済の歴史的発展法則を認識する学ととらえられ、イ

ギリス経済学への方法論的批判が意図されている。

53 Mill,John Stuart

Essays on some unsettled questions of political economy. London, John W. Parker, 1844. vi, 164p. 23cm.

ジョン・ステュアート・ミル『経済学試論集』 初版　ロンドン　1844年

J.S.ミル（1806-73）は古典派経済学の最後の段階での集大成者であり、社会主義や歴史主義などの新思想に直面した過渡期の人としての特質をもつ。本書は、1830年前後に書いた5つの論文（貿易論、恐慌論、生産的・不生産的という語の意味、利潤・利子論、方法論）から成る。

54 McCulloch, John Ramsay

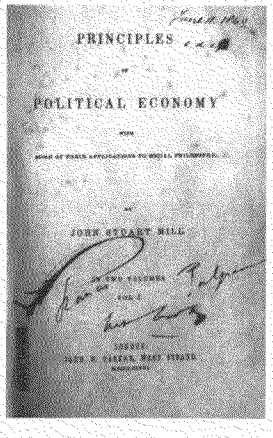
The literature of political economy: a classified catalogue of select publications in the different departments of that science, with historical, critical, and biographical notices. London, Printed for Longman, Brown, Green, and Longmans, 1845. xiii, 407p. 23cm.

マカロック『経済学文献目録』 初版　ロンドン　1845年

マカロックは、経済学者としてリカード理論の普及につとめただけでなく、各種の辞典・統計書・論文集を作成し、『国富論』の註解つき新版（1828年）、リカード著作集（1846年）、重商主義期の著述家たちの論文集（1856-59年）などを刊行した。この註釈つきの経済学文献目録も、マカロックのそのような書誌学者としての側面を示すものである。

55 Mill, John Stuart

Principles of political economy, with some of their applications to social philosophy. London, John W. Parker, 1848. 2v. 23cm. Bookplate of Robert Harry Inglis Palgrave.



ジョン・ステュアート・ミル『経済学原理』 初版　ロンドン　1848年

J.S.ミルの経済学上の主著である本書は、1830年代以後の社会問題の深刻化や周期的恐慌の発生という新事態に対して古典派経済学の再編成を期したものであり、マーシャルの『経済学原理』の出現（1890年）まで、当代の最高権威としてひろく普及した。本書が出版された1848年は、ヨーロッパを揺るがした革命の年であり、マルク

ス＝エンゲルスの『共産党宣言』と、ヒルデブラントの主著『現在ならびに将来の国民経済学』との刊行年でもあった。

ミルの本書全体は、理論と政策とに大別され、前者は静態論（生産・分配・交換）と動態論とに区分されている。自律的な経済法則（土地収穫逓減法則を中核とする生産法則）と、人為的対応の可能な分配法則との区別は、とくに有名である。本書は、資本蓄積による労働生産力の増大を基調とする点ではリカードを継承するものであったが、相対価値論、利子制欲説、賃金基金説などによってリカードの理論的枠組を解体する方向を表示している。

〔付記〕本節「経済思想史上の古典」の文献解説については、小林昇編『経済学史小辞典』、学生社、1963年、をはじめ、多くの関連研究文献を参照させて頂いたことを、おことわりしておきたい。

Ⅱ　イギリス地金論争関連文献

地 金 論 争

18世紀後半から19世紀初期にかけてのイギリスは、国内では産業革命が進行し、国際的には1793-1815年の間フランスとの戦争が起こり、さらに1797年に、イングランド銀行券に対する正貨（＝金）支払が停止される事態が生じ、経済的、政治的に著しい激動の時代であった。

戦争のために政府の支出が増加し、イングランド銀行の保有正貨が減少するに至って、イングランド銀行は陸海軍への支払および枢密院の命令に基づく支払以外は、いかなる債権者に対しても正貨を以て支払うことを禁止されたのである。この正貨支払停止は、当初、極めて一時的な処置と予想されていたが幾度も延長されて、結局、1821年の支払再開に至るまで継続した。1797-1821年の期間が、いわゆる銀行制限時代（Bank Restriction Period）であるが、この間に生じた物価の騰貴、金地金の市場価格の騰貴、為替相場の下落という現象をめぐって一連の通貨論争が展開された。当時イギリスにおいては、地方銀行がロンドンの銀行に依存し、ロンドンの銀行がさらにイングランド銀行に依存する機構、要するに、金準備の中央貯蔵所であるとともに、最終的貸手であるイングランド銀行を頂点とする金融制度が形成され始めていた。ところが1797年の兌換停止により、イングランド銀行は金準備に制約されることなく銀行券を発行することが可能になった。したがって、兌換停止下のインフレーション現象と関連して、中央銀行であるイングランド銀行の政策が論議されることになったのである。この種の論議は、まず1800年頃に現われ、次いで、1804年にアイルランド銀行に関して起こった。さらに、1810年に議会下院が、金地金の高価の原因とそれが紙幣の価値に及ぼす影響とを調査するための特別委員会、すなわち、地金委員会（Bullion Committee）を任命し、地金報告書（Bullion Report）が提出されるに至って、論争は絶頂に達した。これが一般に、地金論争（Bullion Controversy）と呼ばれるものである。当時の論議は複雑な内容を含んでいたので、論者の立場を明確に分類することは容易ではないが、地金論争の参加者は、大きく二つの対立する陣営に分けられる。一方は、地金論者（Bullionist）といわれ、地金報告書を擁護したグループである。地金報告書は、物価、地金の

価格および為替相場に現われた諸現象の原因を兌換停止によるイングランド銀行券の過剰発行にあるとし、イングランド銀行に速やかな兌換再開を要求した。他方は、地金報告書を批判し、政府とイングランド銀行を弁護した反地金論者（Anti-bullionist）であった。彼らは、前記の諸現象は、それぞれ穀物の不作、地金に対する需要増加、国際収支の逆調等の個別的原因に基づくものであり、イングランド銀行が商業手形割引によって取引要求に応じてだけ銀行券を発行する限り、過剰発行は起こり得ないと主張した。両者の論争は、1810年から翌年にかけて議会の内外で活発に闘わされたが、同じ地金論者の間にも、リカードとマルサスの対立に見られるように重要な見解の相違があったのである。1810-11年に刊行された地金論争関係の小冊子の数は、「パンフレットの戦い」といわれたように、銀行制限時代の他の何れの年よりも著しく多かった。1811年に下院は、地金主義の主張を否決し、反対に反地金主義の見解を採用して、論争に一応の終止符を打った。しかし、戦後になると、兌換開始に関する問題が再び論議の焦点となり、1819年には、兌換再開法（Bank Resumption Act）が成立した。このときにもまた、地金報告書の場合に次いで、激しい論争が繰り広げられたのである。

地金論争においては、貨幣理論、外国為替理論、国際収支調整機構論、中央銀行政策論等の広範な原理が討議され、この論争によって、貨幣・金融上の問題の理論的考察が進展した。

1821年に、旧平価で正貨支払が再開されたが、イギリスは、1825年以後周期的に恐慌に直面し、銀行の支払停止が生じた。そこで、これらの恐慌と銀行券との関連が問題視されるようになり、地金論争は形を変えて再燃した。1844年のイングランド銀行法（Bank Charter Act of 1844）をめぐって、銀行券発行制度に関して論議された通貨主義（Currency principle）と銀行主義（Banking principle）との対立である。この通貨主義と銀行主義との論争は、マネタリズムとケインズ主義との論争という形で現代の通貨論争に継承されている。

成城大学高垣文庫には、地金論争時に出版された貴重なパンフレットを含む膨大な地金論争関係の文献が所蔵されており、それらは、世界有数のコレクションとして知られている。

1 **[AtKinson, Jasper]**

Considerations on the propriety of the Bank of England resuming its payments in specie at the period prescribed by the Act 37th, George III. London, Printed for J. Hatchard and J. Sewell, 1802. 110p. tables (part fold.) 22cm.

アトキンソン『ジョージ3世治世第37年法律によって規定された時期に、イングランド銀行による正貨支払を再開することの妥当性に関する考察』 ロンドン 1802年

ジャスパー・アトキンソンの匿名のパンフレット。イングランド銀行が正貨支払を再開することの当否に関する論議において、アトキンソンはイングランド銀行を弁護し、正貨支払再開の延期を提案した。

2 **Blake, William**

Observations on the principles which regulate the course of exchange; and on the present depreciated state of the currency, London, Printed for Edmund Lloyd, 1810. iv, [5]-132p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 13.)

ブレイク『為替相場を規制する原理および通貨の減価状態に関する考察』 ロンドン 1810年

ブレイクの外国為替理論に関する著作。ウィリアム・ブレイク（1774-1852）は、1807年に王立学会会員となり、1810年に本パンフレットを公刊して著名となった。彼は為替相場の変動要因を分析し、為替相場を国際収支の状況によって変化する実質為替相場と、通貨価値の相対的変動によって変化する名目為替相場に区別したが、この二つの為替相場の総合作用の結果として現実の為替相場（算定為替相場）が決定されると論じた。ブレイクの著作には、その他『正貨支払制限時期に政府支出によって生じる影響に関する考察』（Observations on the effects produced by the expenditure of governments during the restrction of cash payments, 1823.）がある。彼は最初、堅実な地金論者として知られていたが、この著書において地金主義に反対の立場を表明した。

3 **[Boase, Henry]**

Guineas; an unnecessary and expensive incumbrance on commerce; or, The impolicy of repealing the Bank restriction bill considered. London, Printed by W. Bulmer, for G. and W. Nicol, 1802. x, 11-123p. 21cm.

ボァーズ『商業に対して無用で犠牲である邪魔物のギニー貨、銀行制限法案を廃止することの不得策の考察』 ロンドン 1802年

ボァーズの匿名のパンフレット。反地金論者ヘンリー・ボァーズ（1763-1827）は、正貨支払制限が、慎重で健全な政策の永久的な措置として継続されることを示唆した。

4　Boase, Henry

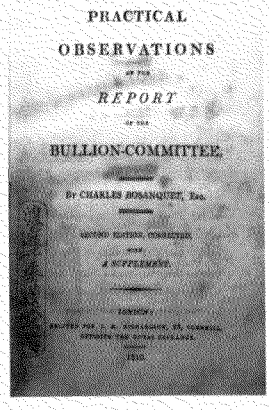
Remarks on the new doctrine concerning the supposed depreciation of our currency. London, Printed by W. Bulmer, 1811. viii, 110p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 11.)

ボァーズ『通貨の減価に関する新原理についての所見』　ロンドン　1811年

兌換停止下において、イングランド銀行券の過剰発行とともに地方銀行券の膨張について論議がなされた。ボァーズは、地方銀行の弊害は通貨の膨張にあるのではなくて、地方銀行の破産とそれに伴う銀行券に対する不信用による欠陥であることを示唆した。

5　[Bosanquet, Charles]

Practical observations on the Report of the Bullion-committee. 2nd ed., cor., with a supplement. London, Printed for J. M. Richardson, 1810. viii, 134p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 7.)

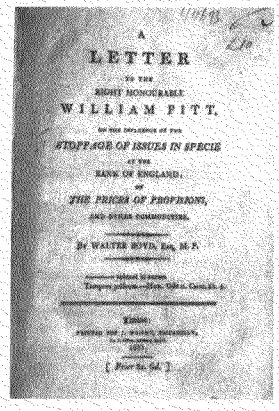

PRACTICAL
OBSERVATIONS
ON THE
REPORT
OF THE
BULLION-COMMITTEE,
By CHARLES BOSANQUET, Esq.
SECOND EDITION, CORRECTED,
WITH
A SUPPLEMENT.
LONDON:
1810.

ボゥズンキット『地金委員会報告書に関する実際的所見』　ロンドン　1810年

反地金主義の代表的文献であり、地金報告書に対するあらゆる反対論の中で最も有力なものといわれている。1810年11月の後半に出版された。チャールズ・ボゥズンキット（1769-1850）は、本パンフレットにおいて地金報告書の理論を否定したが、地金報告書の概要ともいわれるリカードの著作に対して、特に批判を向けた。ボゥズンキットによれば、正貨支払停止後の物価騰貴の原因は、穀物の不足と対仏戦争開始以来の租税の増加であり、通貨の過剰が原因ではなかった。為替相場とイングランド銀行券の数量との間にも何ら関係が見られなかった。国際収支が順調にならない限り、為替相場が改善することも、あるいは通貨の縮小から地金の価格に下落が生ずることもあり得ない。彼は典型的な反地金論者として、取引が必要とする以上は発行されないという見解から、銀行券の過剰発行の可能性を否定した。ボゥズンキットは、正貨支払の再開によって多くの弊害が起こることを確信していた。

6 Boyd, Walter

A letter to the Right Honourable William Pitt, on the influence of the stoppage of issues in specie at the Bank of England; on the prices of provisions, and other commodities. London, Printed for J. Wright, by T. Gillet, 1801. vii, 112p. 21cm.

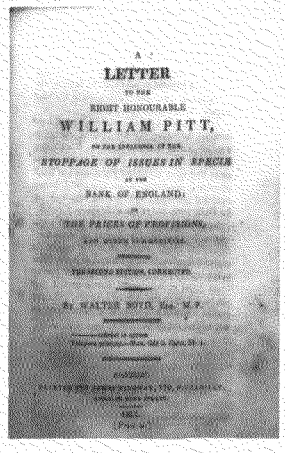

A
LETTER
TO THE
RIGHT HONOURABLE
WILLIAM PITT,
ON THE INFLUENCE OF THE
STOPPAGE OF ISSUES IN SPECIE
AT THE
BANK OF ENGLAND;
ON
THE PRICES OF PROVISIONS,
AND OTHER COMMODITIES.
By WALTER BOYD, Esq. M.P.
LONDON:
PRINTED FOR J. WRIGHT, PICCADILLY,
BY T. GILLET.
1801.
[Price 2s. 6d.]

7 Boyd, Walter

——2nd ed., cor. London, Printed for James Ridgway, 1811. viii, 112p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 11.)

8 Boyd, Walter

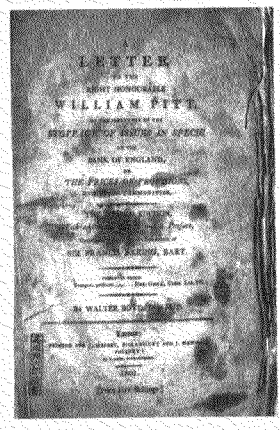
——2nd ed., with additional notes; and a preface, containing remarks on the publication of Sir Francis Baring, Bart. London, Printed for J. Wright, 1801. 1vi, 87, 48p. 23cm.


A
LETTER
TO THE
RIGHT HONOURABLE
WILLIAM PITT,
ON THE INFLUENCE OF THE
STOPPAGE OF ISSUES IN SPECIE
AT THE
BANK OF ENGLAND;
ON
THE PRICES OF PROVISIONS,
AND OTHER COMMODITIES.
THE SECOND EDITION, CORRECTED.
By WALTER BOYD, Esq. M.P.
LONDON:
PRINTED FOR JOHN RIDGWAY, 170, PICCADILLY.
1811.
[Price 4s.]

ボイド『イングランド銀行における正貨発行停止の、食糧品価格および他の諸物価に及ぼせる影響について、ウィリアム・ピット閣下に捧げる書簡』 ロンドン 1801年

ウォルター・ボイド（1754?-1837）は、パリで認められた銀行家であったが、革命を逃れてロンドンに移住し、ベンフィールド（Paul Benfield）と共同で金融業者兼公債請負人となり、1796年には議会に選出された。同年、イングランド銀行から信用供与を拒否され、また首相ピットが、1799年の公債をボイド商会に請け負わせることを許可しなかったために、1800年にこの商会は破産した。『ウィリアム・ピット閣下に捧げる書簡』は、1801年にパンフレットとして公表された。本書においてボイドは、当時の物価騰貴が、イングランド銀行券の過剰発行による減価に起因することを論証しようとした。彼はフランスにおいて、不換紙幣の減価による物価騰貴を経験したので、兌換停止となったイングランド銀行券もまた、フランスのアシニァ紙幣のように減価が起こりうることを恐れたのであった。ボイドは物価騰貴の原因として、凶作による穀物の不足、買占人や仲買人による穀物の独占、人口の増加、戦争の影響等を検討したが、それらすべては、一般的影響を生じ得ない部分的原因であると見た。そして、過剰発行による銀行券の減価は、金地金の高価と外国為替相場の下落という二つの事実から証明されると主張し、地金主義の立場を表明した。ボイド

のパンフレットは公衆の関心を呼び起こし、続いて起こった激しい地金論争の発端となった。


LETTER
WILLIAM PITT
BANK OF ENGLAND,

ボイドの見解に対する反論としては、フランシス・ベアリングの『ウォルター・ボイドの出版物に関する所見』(Barinng, Sir Francis. Observations on the publication of Walter Boyd, Esq., M. P. London, 1801.) と，匿名の著者による『イングランド銀行の正貨発行停止についてボイド氏からピット卿に宛てた書簡に関する短見』(Brief observations on a late letter addressed to the Right Hon. W. Pitt, by W. Boyd, Esq., on the stoppage of issues in specie by the Bank of England, &c. London, 1801.) 等のパンフレットが、特に注目すべきものであった。

ボイドの『ウイリアム・ピット閣下に捧げる書簡』には、第二版として1811年の他に、既に1801年に出版されたものがある。ボイドはベアリングの批判に対しては、この1801年の第二版に50ページに及ぶ序文を附加して、その中で答えている。

9　Canning, George

Substance of two speeches, delivered in the House of Commons, by the Right Honourable George Canning, on Wednesday the 8th, and Monday the 13th of May, 1811, in the committee of the whole house; to which was referred, the report of the committee, appointed in the last session of Parliament "To inquire into the cause of the high price of bullion, and to take into consideration the state of the circulating medium, and of the exchanges between Great-Britain and foreign parts." London, Printed for J. Hatchard, 1811. 155p. 21cm.

キャニング『1811年５月８日水曜日および13日月曜日、下院におけるジョージ・キャニングの演説要旨』　ロンドン　1811年

ジョージ・キャニング (1770-1827) は、1811年５月８日、下院において、地金報告書の理論は支持するが、正貨支払再開の勧告には反対であると述べた。

10　Castlereagh, Rovert Stewart, Lord Viscount

The substance of a speech delivered by Lord Viscount Castlereagh, in a committee of the House of Commons, May 8, 1811; on the Report of the Bullion committee. London, Printed for J. J. Stockdale, 1811. 50p. 21cm.

カッスルレイ『1811年５月８日下院委員会における、地金報告書に関するカッスルレイ

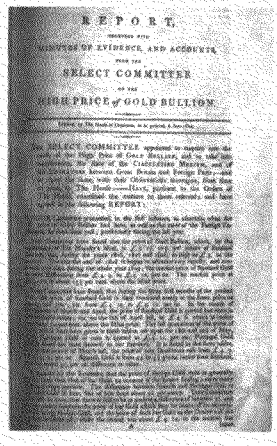
の演説要旨』 ロンドン 1811年

カッスルレイ（1769-1822）の地金報告書に対する反対論。カッスルレイは、イングランド銀行の支払制限は戦時下における止むを得ない措置であり、必要がなくなればそれは撤廃されるであろう、そして、金地金の騰貴は銀行券の減価ではなく、金の価値が増大したからであると主張した。

（本書は『高垣文庫貴重書目録』では "Londonderry, Robert Stewart, 2d marquis of" と表示されている）

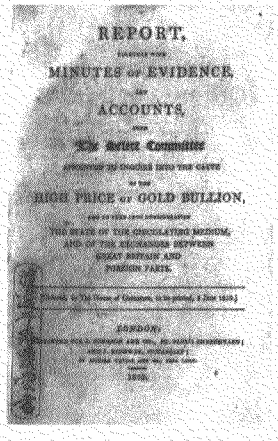
11 **Gt. Brit. Parliament. House of Commons. Select Committee on the High Price of Gold Bullion.**

Report, together with minutes of evidence, and accounts, from the Select committee on the high price of gold bullion. Ordered, by the House of Commons, to be printed, 8 June, 1810. [London, 1810] 232p. 33cm.


REPORT,
MINUTES OF EVIDENCE, AND ACCOUNTS,
SELECT COMMITTEE
HIGH PRICE of GOLD BULLION.

12 **Gt. Brit. Parliament. House of Commons. Select Committee on the High Price of Gold Bullion.**

Report, together with minutes of evidence, and accounts, from the Select committee appointed to inquire into the cause of the high price of gold bullion, and to take into consideration the state of the circulating medium, and of the exchanges between Great Britain and foreign parts. London, Reprinted by Richard Taylor, 1810. x, 78, 237, 115p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 5.)


REPORT,
MINUTES OF EVIDENCE,
ACCOUNTS,
HIGH PRICE of GOLD BULLION,
THE STATE OF THE CIRCULATING MEDIUM,
AND OF THE EXCHANGES BETWEEN
GREAT BRITAIN AND
FOREIGN PARTS.
LONDON:

『金地金の高価の原因を調査し、流通手段とグレート・ブリテンの外国為替との状態を考察するために、任命された特別委員会の報告書、ならびに証言録と統計。1810年6月8日、下院により印刷を命令された。』 ロンドン 1810年

地金委員会報告書、略して「地金報告書」または「地金報告」といわれている。

1810年2月1日下院において、フランシス・ホーナーは銀行券と地金取引の現状につ

いて報告し、それを検討するための委員会を設置すべきことを提案した。そして、イングランド銀行券の額、外国為替相場、金の価格およびその他、これに関連したいくつかの統計表が下院に提出されることを動議した。この動議は可決され、2月19日に金地金の高価の原因を検討するために、委員22名から成る地金委員会が任命された。2月から5月の間に委員会は31回会合を開き、イングランド銀行理事、個人銀行家、商人その他29人の証言を求めた。委員の中にも証言の中にも、対立する意見があった。ホーナー、ハスキッスンおよびソーントンによって起草された地金委員会の報告書は、6月8日に正式に下院に提出され、8月12日に発行された。これが、いわゆるフォリオ版である。翌8月13日のすべての新聞は、地金報告書の要旨を掲載した。地金報告書の公表がもたらした影響は極めて大きかったので、需要に応ずるため、9月には翻刻版が発行された。これがオクテーボ版であり、さらにその新版が12月に刊行された。

キャナン『1797-1821年の紙幣ポンド』は、地金報告書の本文を翻刻し、それに当時の情勢を書き添えたものである。

(Edwin Cannan. The paper pound of 1797-1821. A Reprint of the bullion report, with an introduction by E. Cannan. London, P. S. King & Son, Ltd., 1st ed., 1919, xlix, 71p. 2nd ed., 1925. 6, xlix, 72p. Reprinted by Tokyo, Senjo Puplishing Co. Ltd., 1962.)

13 [Herries, John Charles]

A review of the controversy respecting the high price of bullion, and the state of our currency. London, Printed for J. Budd, 1811. ii, 119p. 2 fold. tables. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 16.)

ヘリス『地金の高価および我が国の通貨状態に関する論争の評論』 ロンドン　1811年

ジョン・チャールズ・ヘリス (1778-1855) の匿名のパンフレット。反地金論者ヘリスは、正貨支払停止下における対外トランスファーと外国為替相場との関係を考察した。

14 Hill, John, of Hull.

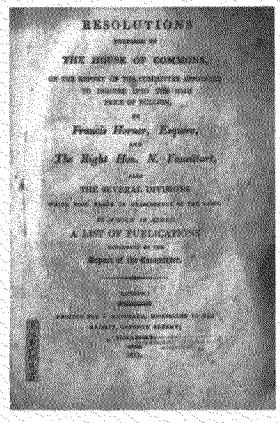
An inquiry into the causes of the present high price of gold bullion in England, and its connection with the state of foreign exchanges; with observations on the Report of the Bullion committee. In a series of letters addressed to Thomas Thompson, Esq., M. P., one of the members of the Bullion committee. London, Printed for Longman, Hurst, Rees, Orme, and Brown, Pater, 1810. vii, 152p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 7.)

ジョン・ヒル『地金委員会のメンバー、トーマス・トムプスン氏宛書簡集における地金報告書に関する考察、イングランドの金地金高価の原因および外国為替の状態との関係についての検討』 ロンドン　1810年

ジョン・ヒルから地金委員会のメンバーであるトーマス・トムプスン宛の書簡集をパンフレットとして公表したものである。反地金論者ヒルは、兌換停止下においても銀行券は十分満足のいくように機能すると考えたが、しかし、次のような理由から兌換が望ましいと主張した。すなわち、金準備は緊急時に対外支払を可能にさせる。地方銀行は経常的にイングランド銀行券よりも正貨をより多く保有する。そして兌換は銀行制限期よりも、臨時の一時的な銀行券の過剰発行に対して、より規則的で確実な抑制策を提供するであろう。

15 Horner, Francis

Resolutions proposed to the House of Commons, on the Report of the Committee appointed to inquire into the high price of bullion, by Francis Horner, Esq., and the Right Hon. N. Vansittart, also the several divisions which took place in consequence of the same. To which is added, a list of publications occasioned by the Report of the Committee. London, Printed for J. Hatchard, 1811. 24p. 23cm.


RESOLUTIONS
THE HOUSE OF COMMONS,
Francis Horner, Esquire,
The Right Hon. N. Vansittart,
A LIST OF PUBLICATIONS

『地金の高価を調査するために任命された委員会の報告書について、ホーナーおよびバンシタートの下院に提出した決議案』 ロンドン 1811年

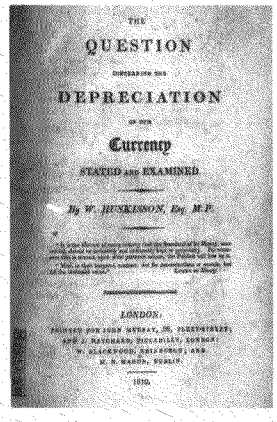
フランシス・ホーナーの決議案およびニコラス・バンシタートの決議案。

地金報告書は1810年8月に発行されたが、下院では翌年まで討議されなかった。1811年4月5日にホーナーの提案に基づいて、報告書の討議が4月29日に行われることが可決された。しかし討議は、5月6日まで延期された。その間の数週間に、報告書の支持者と反対者との双方によって決議案が作成され、配布された。すなわち、4月22日には、ホーナーの16カ条の決議案が提出され、印刷を命ぜられた。また4月26日には、バンシタートの17カ条の反対決議案が「貨幣・地金および為替に関する提案」(Propositions respecting money, bullion and exchanges) の表題で印刷に付された。5月3日には、バンシタートの提案に対するホーナーの修正案が提出された。ホーナーの決議案の討議は、5月6日に始まり、5月9日にその全決議案の否決をもって終わった。他方、バンシタートの提案の討議は5月13日に始まり、5月15日に採決された。

なお、本パンフレットには、付録として「地金報告書に伴う出版物のリスト」が添えられており、4ページにわたり、72編が収められている。

16　Huskisson, William

The question concerning the depreciation of our currency stated and examined. London, Printed for John Murray, 1810. 1 p. l., xix, 154p. 22cm.


THE
QUESTION
DEPRECIATION
Currency
STATED AND EXAMINED
By W. HUSKISSON, Esq. M.P.
LONDON:
1810.

ハスキッスン『我が国における通貨の減価に関する問題』　ロンドン　1810年

ハスキッスンの紙幣減価論に関する著作。地金主義の主張を知る上に重要な文献とされている。ウィリアム・ハスキッスン（1770-1830）は、1796年に下院議員に選出され、1804-5年、1807-1809年には国庫長官であった。1810年地金委員会の委員となり、ホーナー、ソーントンと分担して地金報告書を起草した。

17　Jackson, Randle

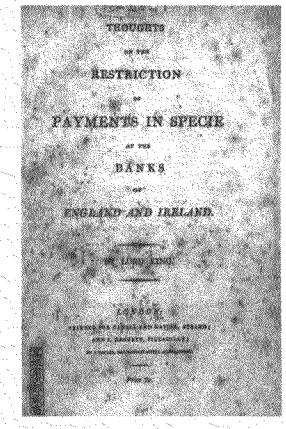
The speech of Randle Jackson, Esq. delivered at the General court of the Bank of England, held on the 20th of September, 1810, respecting the Report of the Bullion committee of the House of Commons; with notes on the subject of that Report. London, Printed for J. Butterworth, [1810]　2 p. l., [3]-54p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 11.)

ジャクスン『1810年９月20日イングランド銀行の株主総会における、地金報告書に関するランドル・ジャクスンの演説』　ロンドン　1810年

ランドル・ジャクスン（1757-1837）は、1810年９月20日にイングランド銀行の株主総会で、イングランド銀行のために地金報告書を攻撃する有力な演説をした。この演説は翌日の『モーニング・クロニクル』紙に掲載され、それに加筆されたものが、パンフレットとして公表された。これに対して、地金報告書を擁護する地金論者リカードは、９月24日に同紙に書簡を発表し、ジャクスンの演説に反論した。

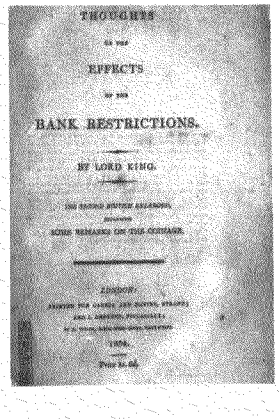
18 **King, Peter King, 7th baron**

Thoughts on the restriction of payments in specie at the Banks of England and Ireland. By Lord King. London, Printed for Cadell and Davies, and J. Debrett, by J. Taylor, [advertisment 1803] 2 p. l., 106p. 21cm.


THOUGHTS
ON THE
RESTRICTION
OF
PAYMENTS IN SPECIE
AT THE
BANKS
OF
ENGLAND AND IRELAND.
BY LORD KING.
LONDON:

19 **King, Peter King, 7th baron**

Thoughts on the effects of the bank restrictions. 2nd ed. enl., including some remarks on the coinage. London, Printed for Cadell and Davies, 1804. viii, 178p. 22cm.


THOUGHTS
ON THE
EFFECTS
OF THE
BANK RESTRICTIONS.
BY LORD KING.
SOME REMARKS ON THE COINAGE.
LONDON:

キング卿『イングランドおよびアイルランド銀行における正貨支払制限に関する所見』 ロンドン 1803年

第7代キング卿（ペーター・キング、1776-1813）は、1793年に男爵位を継承し、97年に上院議員に選出された。1803年2月にキングは、議会でイングランドおよびアイルランド両銀行の正貨支払停止を更新する法案に反対する演説をした。その頃アイルランドのロンドン宛為替相場が不利になり、同年5月にキングは、アイルランド為替の状態をアイルランド銀行券の過剰発行に帰する演説を行い、アイルランド為替問題を初めて議会で取り上げた。彼の演説の趣旨は5月20日付の序文を付して、パンフレットにまとめられ公表された。翌1804年には、同書を拡充した第二判が刊行されたが題名も『銀行制限の影響に関する所見』と改められている。キングのパンフレットは、証明が明確であり、表現が明快簡潔であって説得力をもっていたために、地金主義の主要な文献の一つとなった。

キングによれば、紙幣の使用はそれが正しい交換の媒介物として役立つときにのみ正当化される。その適正の量を維持するためには、紙幣は直ちに無条件に正貨に兌換されるべきである。正貨支払の義務が停止したときには、通貨はもはやその決定的な価値をもつことができない。それは公衆の側における信頼の喪失と紙幣の数量の不当な増加という二つの異なる原因によって、減価する危険がある。彼はイギリスの通貨に対する信頼は、そのときまだ失われていないと見ていた。そして、通貨の過剰とその減価とは、地金の価格と為替の状態との二つの基準によって測定されると主張する。さらにキング

は、反地金論者あるいは一部の地金論者と同様、通貨の過剰以外に、対外支払が地金の価格や為替相場に作用することを認めた。

20　Lauderdale, James Maitland, 8th earl of

Thoughts on the alarming state of the circulation, and on the means of redressing the pecuniary grievances in Ireland. Edinburgh, Printed by James Ballantyne for A. Constable, 1805. 2 p. l., 122p. tables. 21cm.

ローダーデール『アイルランドにおける流通の不安な状態および金銭上の苦情を除く方法に関する所見』　エディンバラ　1805年

イングランド銀行の正貨支払停止後、アイルランドにもイングランドと同様の事態が起こり、議会はその通貨状態を調査させるために委員会を設けた。委員会は1804年5月から6月にわたり、詳細な証言記録と統計付録とを添えた報告書、すなわち、アイルランド通貨委員会報告書を議会に提出した。このアイルランド通貨報告は、多くの議論を呼び起こす契機となった。

第8代ローダーデール伯（ジェームズ・メートランド・ローダーデール、1759-1839）は、本書において、不利な為替および地金に対するプレミアムは、アイルランド銀行券の減価の証拠であり、その過剰発行は、このような減価の唯一の原因であったというアイルランド通貨報告の論点に同意し、銀行券を縮小することが、現在の弊害に対する唯一の救済策であると主張した。

21　Mushet, Robert

An enquiry into the effects produced on the national currency, and rates of exchange, by the Bank restriction bill; explaining the cause of the high price of bullion; with plans for maintaining the national coins in a state of uniformity and perfection. 2nd ed. With some observations on country banks, and on Mr. Grenfell's examination of the tables of exchange annexed to the first edition. London, Printed by and for C. and R. Baldwin, 1810. 2 p. l., 112p. tables. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 7.)

マシェト『地金の高価の原因の説明、銀行制限法案によって我が国の通貨と為替相場に生じた影響の検討、通貨を不変で完全な状態に維持する方策』　ロンドン　1810年

地金論者ロバート・マシェト（1782-1828）は、正貨支払停止下の地金の高価、物価の騰貴、外国為替相場の逆調の原因を検討し、正貨支払の再開を主張した。マシェトのこのパンフレットは、同じく1810年に刊行されたリカードの『地金の高価』とともに、当時の通貨問題に対する公衆の関心を高めるのに寄与した。

22 Parnell, Henry

Observations upon the state of currency in Ireland, and upon the course of exchange between Dublin and London. By Henry Parnell. 3rd ed. Dublin, Printed for M. N. Mahon, 1804. 80p. 22cm. Bound with: The Anti-Jacobin review and magazine; &c. &c. &c. for August, 1804. Vol. 18. No. 74.

パーネル『アイルランドの通貨状態およびダブリンとロンドン間の為替相場に関する考察』 ダブリン 1804年

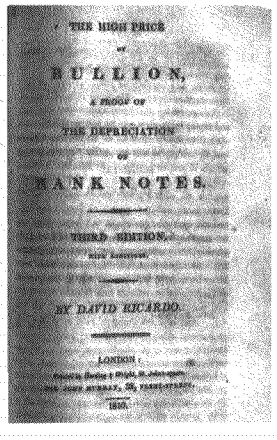
ヘンリー・パーネル（1776-1842）は、1797年にアイルランドの国会議員となり、1810年地金委員会の委員に任命されている。本書において、パーネルは、ソーントン、ホーナー、キング等によって示された理論をアイルランドの通貨状態に適用させたが、特に、キングの『イングランドおよびアイルランド銀行における正貨支払制限に関する所見』の影響が大きかった。パーネルは、正貨支払制限以前には、銀行券の発行が自動的に調節された事実、それ以来の過剰発行、地金に対するプレミアム、為替相場の逆調、および紙幣の割引によって証明された紙幣の減価の事実等を明らかにした。そして救済策として、イギリス本国とアイルランドとの通貨を等しくすること、すなわち、アイルランド銀行はその銀行券を要求に応じてイングランド銀行券に換え、為替相場の改善、地金に対するプレミアムの縮小をもたらすべきことを提案した。

パーネルの著作には、その他『通貨および為替の原理』（Prinsciples of currency and exchange, illustrated by observations upon the state of currency of Ireland. London, 1805.）と題するパンフレットがある。

（本書は『高垣文庫貴重書目録』では "Congleton, Henry Brooke Parnell, 1st baron" と表示されている。）

23 Ricardo, David

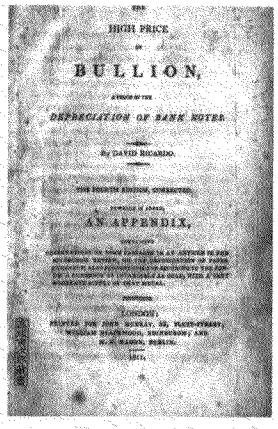
The high price of bullion, a proof of the depreciation of bank notes. 3rd ed., with additions. London, Printed by Harding & Wright, for J. Murray, 1810. iv, 56p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 8.)


THE HIGH PRICE
OF
BULLION,
A PROOF OF
THE DEPRECIATION
OF
BANK NOTES.
THIRD EDITION.
BY DAVID RICARDO.
LONDON:

24 Ricardo, David

——4th ed., cor. To which is added, an appendix, containing observations on some passages in an article in the Edinburgh review, on the depreciation of paper currency; also suggestions for securing to the public a currency as invariable as gold, with

a very moderate supply of that metal. London, Printed for John Murray, 1811. 2 p. l., 97p. 21cm.


THE
HIGH PRICE
OF
BULLION,
A PROOF OF THE
DEPRECIATION OF BANK NOTES.
By DAVID RICARDO.
THE FOURTH EDITION, CORRECTED,
TO WHICH IS ADDED,
AN APPENDIX,
LONDON:
PRINTED FOR JOHN MURRAY, 32, FLEET-STREET;
WILLIAM BLACKWOOD, EDINBURGH; AND
W. M. CURDY, DUBLIN.
1811.

リカード『地金の高価、銀行券減価の証拠』　ロンドン　1810年

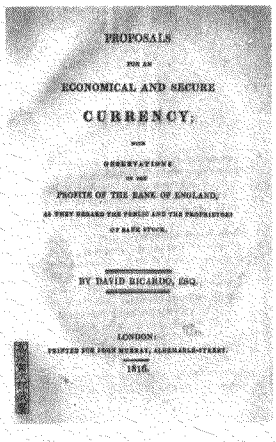
古典学派経済学の完成者デビッド・リカード（1772-1823）の貨幣理論を知る上に重要な文献である。典型的な地金主義の主張が述べられている。

1797年のイングランド銀行による正貨支払停止後1809年に至って、金地金の価格が、それ以前の時期に比べて急速にかつ、大幅に騰貴するようになった。こうした情勢に刺激されて、それまで一介の株式市場の商人に過ぎず、評論家としても学者としても一般に知られていなかったリカードが、1809年８月から11月にかけて３回にわたって、『モーニング・クロニクル』紙に「金の価格」を論じた書簡を寄稿した。そして、その見解を一層周知させるために、翌1810年１月、『地金の高価、銀行券減価の証拠』と題するパンフレットの形で彼の見解を再び公にした。リカードのこのパンフレットは、1811年４月に増補第４版が出版されている。この第４版では、本文にはほとんど改訂は行われなかったが、序文は削除され、『エディンバラ・レヴュー』へ寄稿のマルサスの論文に対するリカードの批評を含み、また1816年に、リカードが『経済的で安定的な通貨のための提案』の中で展開した地金支払の計画の輪郭を描いた、「付録」が付け加えられている。「付録」はまた、独立のパンフレットとしても出版された。

『地金の高価、銀行券減価の証拠』は、イギリスにおける当時の物価および金地金の騰貴、為替相場の下落の原因を究明し、その救済策を講ずることを意図したものであったが、リカードは、これらの事態をイングランド銀行の正貨支払停止による同行銀行券の過剰発行に基づくものであるとし、弊害を除去するためには、正貨支払を再開して過剰な通貨を収縮する以外に方策がないことを主張した。しかし、どのような方法で兌換を再開するかについては、初版では明らかにされていない。第４版の「付録」の中で彼は、銀行券に対して金地金をもって兌換に応ずる、いわゆる地金案を提案している。リカードは、紙幣の過剰が為替相場下落の唯一の原因であると考えたが、これに対してマルサスは、紙幣の過剰以外に、輸入超過による貿易の変化や対外軍事援助金の増加によっても、為替相場が下落することを指摘し、『エディンバラ・レヴュー』においてリカードの見解を批判した。この為替相場下落の原因をめぐってリカードとマルサスとの間に論争が行われるのであるが、リカードは、「付録」の前半においてマルサスの見解に反論し、彼の最初の主張を変えることはなかった。〔Ⅰ27も参照〕

25 Ricardo, David

Proposals for an economical and secure currency; with observations on the profits of the Bank of England, as they regard the public and the proprietors of bank stock. London, Printed for John Murray, 1816. 126p. 22cm.

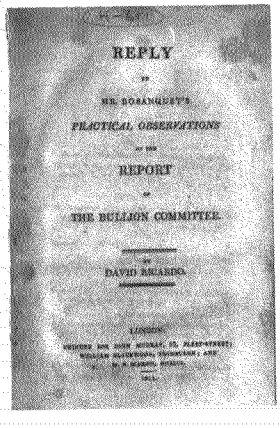

PROPOSALS
FOR AN
ECONOMICAL AND SECURE
CURRENCY;
WITH
OBSERVATIONS
ON THE
PROFITS OF THE BANK OF ENGLAND,
AS THEY REGARD THE PUBLIC AND THE PROPRIETORS
OF BANK STOCK.
BY DAVID RICARDO, ESQ.
LONDON:
PRINTED FOR JOHN MURRAY, ALBEMARLE-STREET.
1816.

リカード『経済的で安定的な通貨のための提案』ロンドン　1816年

リカードは、『地金の高価』第4版の「付録」(1811年4月)において、イングランド銀行券を鋳貨でなく地金で支払わせる、いわゆる地金案の概略を明らかにした。彼はイングランド銀行の正貨支払再開が近いことを予想して、『経済的で安定的な通貨のための提案』と題するパンフレットを出版し、この重要な提案を復活させたのである。リカードが考えた金本位の基本的条件は、金貨の鋳造流通ではなくして、国際的取引のための金への兌換性であった。リカードは1819年、正貨支払を再開する方策に関して議会に設けられた委員会において、地金案を積極的な主張として証言し、その案は、委員会における論議の中心となった。リカードの提案した金地金兌換の方法は、1819年の兌換再開法に取り入れられたが、十分な試験期さえ与えられず廃止され、1821年にイングランド銀行は、旧平価での正貨兌換に復帰した。地金案は、兌換の開始を容易にするために過渡的方法として採用されたに過ぎなかった。しかし、その後、第一次世界大戦を経て、1925年にはイギリスにおいて、金本位法として再び採用され、正規の制度となったのである。〔I 34も参照〕

26 Ricardo, David

Reply to Mr. Bosanquet's Practical observations on the Report of the Bullion committee. London, Printed for John Murray, 1811. vii, 141p. 22cm.


REPLY
TO
MR. BOSANQUET'S
PRACTICAL OBSERVATIONS
ON THE
REPORT
OF
THE BULLION COMMITTEE.
BY
DAVID RICARDO.
LONDON:

リカード『ボゥズンキット氏の「地金委員会報告書に関する実際的所見」への回答』　ロンドン　1811年

リカードは、ボゥズンキットの反地金主義の見解に対する反論を、パンフレットの形で公表した。

27 Sinclair, Sir John, bart.

Observations on the Report of the Bullion committee. London, Printed by W. Bulmer, 1810. vii, 64p. 22cm.

シンクレア『地金報告書に関する考察』 ロンドン　1810年

地金報告書の公表は、広範な反対陣営、すなわち反地金派を形成させることになった。ジョン・シンクレア（1754-1835）の『地金報告書に関する考察は』は、1810年9月の初めに刊行されたが、地金報告書に対する反対論の最初のものであろうといわれている。シンクレアは、地金報告書の作成過程の不合理性を批判した。さらに、2年後の正貨支払再開を勧告した地金報告書の政策に対して攻撃を加え、現存の通貨制度を擁護した。地金論者リカードは、1810年9月18日、『モーニング・クロニクル』紙に第二の書簡を寄稿し、シンクレアの見解を批判している。

28 Sinclair, Sir John, bart.

The speech of the Right Honourable Sir John Sinclair, Bart. on the subject of the Bullion report, in the House of Commons, on Wednesday, the 15th of May, 1811. London, Printed by B. McMillan, 1811. 16p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 14.)

シンクレア『1811年5月15日水曜日、下院における地金報告書の問題に関するジョン・シンクレアの演説』 ロンドン　1811年

シンクレアは、徹底的な紙幣擁護論を述べている。一国の発展は豊富な流通手段によるとし、地金報告書の採用は、繁栄を阻害するものであると批難した。

29 Sinclair, Sir John, bart.

On the approaching crisis: or, On the impracticability and injustice of resuming cash payments at the Bank, in July 1818: and on the means of elevating the internal prosperity of the British Empire, to a height hitherto unparalleled, by a judicious application of the profits derived from a further suspension of payments in cash. London, 1818. 16p. (*In* the Pamphleteer. Vol. 7. No. 24)

シンクレア『近づく危機、1818年7月に正貨支払を再開することの不当、正貨支払停止の継続による利益の賢明な適用によって、イギリス王国の繁栄を増大させる方法』 ロンドン　1818年

シンクレアは、金属貨幣に対して代用貨幣である銀行券の優位性を指摘し、イギリスの繁栄のために通貨の増加を提唱した。

30 Smith, Thomas, accountant, of London

An essay on the theory of money and exchange. 2nd ed., with considerable additions, including an examination of the Report of the Bullion-committee. London, J. M. Richardson, 1811. viii, 248p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 14.)

トーマス・スミス『貨幣および為替の理論』 ロンドン 1807年

1797年の銀行制限法が、最も賢明な立法であったとする弁護論である。トーマス・スミスのこの著作は、1808年10月の『エディンバラ・レヴュー』で、ジェームズ・ミル(James Mill)によって論評され、リカードの「金の価格」についての論議を呼び起こす機縁となった。

31 Tatham, Edward

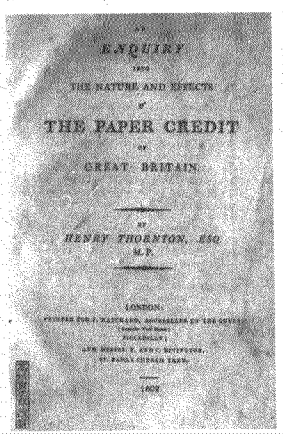
Observations on the scarcity of money; and its effects upon the public. 3rd ed. Oxford, 1816. [445]-474p. 21cm. (*In* The Pamphleteer. Vol. 7)

ティサム『貨幣の不足に関する所見、その公衆への影響』 第3版 オックスフォード 1816年

エドワード・ティサム(1749-1834)は、イギリスにおける1815年の恐慌時の通貨状態を考察した。ティサムは、このパンフレットにおいて、当時の通貨の不足による弊害を指摘し、その救済策として紙幣発行制度の改革を提案した。すなわち、通貨と歳入を増加するために、銀行券発行に対して毎年、印紙税を支払うべきであると主張する。ティサムのパンフレットは、シンクレアの1818年のパンフレットとともに、銀行制限期の後期、いわゆるデフレーション期における主要な文献である。

32 Thornton, Henry

An enquiry into the nature and effects of the paper credit of Great Britain. London, Printed for J. Hatchard, 1802. xii, [13]-320p. 22cm.


AN
ENQUIRY
INTO
THE NATURE AND EFFECTS
OF
THE PAPER CREDIT
OF
GREAT BRITAIN.
BY
HENRY THORNTON, ESQ.
M.P.
LONDON:
1802

ソーントン『紙券信用論』 ロンドン 1802年

ヘンリー・ソーントン(1760-1815)は、1782年以来下院議員に選出されたが、銀行家でもあり、ダウン・ソーントン・フリー銀行を、ロンドンの大銀行の一つにまで繁栄させた。この金融の実際に通じた経験と知識が、議会における彼の地位を高めることになった。1797年、イングランド銀行正貨支払停止の事情を調査するために、上下両院

に設置された秘密委員会に、ソーントンは、証人として召喚されている。さらに、彼は、1810年の地金委員会においては地金報告書の草案者の一人であり、時には、ホーナーに代わって議長役をつとめた。

ソーントンの『紙券信用論』の刊行は、二つの目的をもっていたといわれている。すなわち、第一に、イギリスの危急を救うために、1797年に採られた正貨支払制限の措置を弁護すること、第二に、銀行券の過剰発行による減価について警告することであった。彼は、『紙券信用論』において、正貨支払を制限したことは、戦争による貿易収支逆調の不可避的な結果であったと断定した。そして地金が続いて流出したことは、主として2年にわたる凶作のためであるけれども、部分的には、多額の支出によってもたらされた外国為替相場の下落の結果であったとする。しかし、ソーントンは、為替相場の逆調を回復させるために、銀行券を大幅に収縮させることは、弊害をもたらすことになるので、商取引の拡大のために発券高の緩やかな膨張を認めるべきであると主張した。〔1 23も参照〕

33　[Trotter, Sir Coutts, bart.]

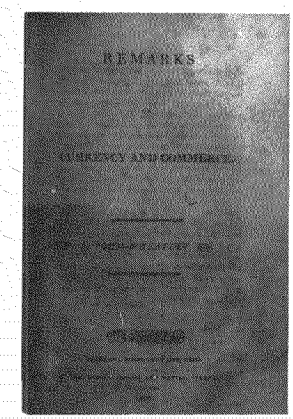
The principles of currency and exchanges applied to the Report from the Select committee of the House of Commons, appointed to inquire into the high price of gold bullion, &c. &c. London, Printed and sold by W. Winchester, 1810. 79p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 10.)

トロッター『金地金の高価を調査するために任命された下院特別委員会の報告書に適用された通貨および為替の原理』ロンドン　1810年

地金報告書を攻撃するクーツ・トロッター（1767-1837）の匿名のパンフレット。1810年12月1日の日付で公刊された。リカードは、このトロッターのパンフレットに対して論評している。

34　Wheatley, John, fl.

Remarks on currency and commerce. London, Printed by T. Burton, for Cadell and Davies, 1803. vi, 262p. 22cm. (*In* Tracts on finance & commerce. Vol. 3.)


REMARKS
CURRENCY AND COMMERCE.

ウィートリー『通貨および商業に関する所見』ロンドン　1803年

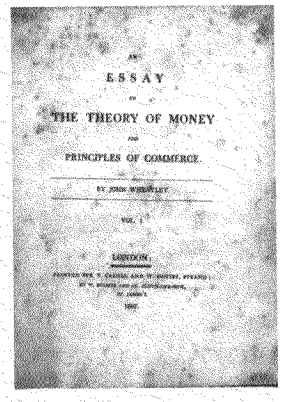
地金論争の初期において、現実の通貨問題にだけとらわれることなく、より一般的な形において、貨幣の諸原理を展開しようと試みたのは、ジョン・ウィートリー（1772-1830）であった。その貨幣

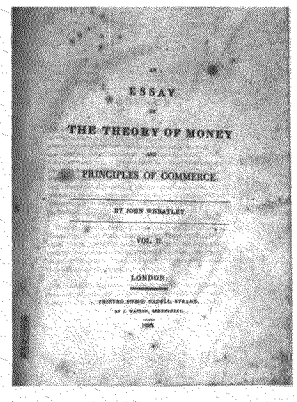
理論の展開は、彼の二つの著作において示された。そのうちの最初のものが、『通貨および商業に関する所見』であって、将来の著作の要綱として、1803年に刊行された。

35 **Wheatley, John, fl.**

An essay on the theory of money and principles of commerce. London, Printed for T. Cadell and W. Davies, by W. Bulmer, 1807-1822. 2v. in 1. fold. tables. 28cm.

Vol. 2 has imprint: London, Printed for T. Cadell, by J. Watton.


AN
ESSAY
ON
THE THEORY OF MONEY
AND
PRINCIPLES OF COMMERCE.
BY JOHN WHEATLEY
VOL. I.
LONDON:


AN
ESSAY
ON
THE THEORY OF MONEY
AND
PRINCIPLES OF COMMERCE.
BY JOHN WHEATLEY
VOL. II.
LONDON:

ウィートリー『貨幣理論と商業の原理』 ロンドン 第1巻 1807年 第2巻 1822年

ウィートリーの貨幣理論に関する第二の著作。第1巻が1807年に、第2巻は1822年に至って公刊された。ウィートリーの理論は、リカードのそれと極めて類似性があるといわれている。すなわち、ウィートリーも、地金論者として、物価の騰貴、為替相場の下落および地金に対するプレミアムを、紙幣の過剰発行に基づく減価の結果であると断定した。しかし、その過剰発行の責任の大部分がイングランド銀行にあるとする地金論者の見解と異なって、ウィートリーは、地方銀行券の過剰発行を批難した。さらに彼は、地方銀行券が危機のときに、デフレ効果をもたらすことに注目した。ウィートリーは、地方銀行の政策を批判し、地方銀行券の過剰あるいは不足の弊害を防ぐために、地方銀行から発券機能を除去し、イングランド銀行に発券の独占権を与えること、そして、その発券に対して、情報を公表する必要があることを主張した。

36 **Tracts** on finance & commerce. 1795-1812. 108 pamphlets in 19v. 22cm.

金融と商業に関する論文集 1795-1812年

『金融と商業に関する論文集』は、1795年から1812年までに出版されたパンフレット108編を合本した19冊の私蔵本である。当時、どのような形で配布されたかは明らかでない。この中には、地金論争関係の重要な文献が収められている。第19巻の末尾には、「1810年6月8日議会に提出された、地金の高価を調査するための下院特別委員会報告

書に伴う、地金および紙幣の問題に関する出版物のリスト」(A list of publications upon the subject of bullion and paper-currency; occasioned by the report of the Select committee of the House of Commons, for inquiring into the high price of bullion, which was laid before Parliament, June 8, 1810.) が付加されており、8ページにわたって、82編を挙げている。

Ⅲ　ジョン・ロー関連文献

ジョン・ロー

「フランスでは、ジョン・ローの計画というはなはだ興味の深い事件がございました。

近代の中央銀行の典型とされておりますイングランド銀行が、国王の特許を得て設立されましたのは1694年のことでありますが、当時、取引の基礎は信用にある、信用の最良の基礎となるものは土地であるといたしまして、土地銀行 Land Bank 設立の主張がイギリスにございました。これは1696年に一旦国王の特許を得たのでございましたが、株式の払い込みを得ないでついに失敗に終りました。

そのころスコットランドにジョン・ローというものがおりました。(1671年に) 豊かなゴールドスミスの家に生れまして、幼少から聡明で算数に長じておりました。国の経済を発達させるためには十分に通貨を供給することが必要であり、信用の基礎としては土地が最も適当であるという考えをもっておりました。24歳のとき大陸に渡り、諸都市の繁栄の状況を視察して故国に帰りまして、『貿易委員会設置の提案』(Ⅲ13) と『貨幣および貿易論』(Ⅲ1, 2) という2つの書物を著わしました。かれはスコットランドの経済状態の振るわないことを、金銀が貨幣として適当でないためだといたしまして、つねに必要な量の通貨を社会に供給することを任務とする委員会を設置すべきことを提案いたしました。

その説が政府に容れられないことを知りますると、かれは再び大陸に渡りまして、1708年パリを訪れました。かれの志は自らの説を実現しうる国を求めていたのでございます。

ルイ14世末期のフランスでは通貨の不足が深刻でありまして、財政は著しく窮乏し、産業は衰退しておりました……。やがてその跡をついだルイ15世は未だ幼少でありましたから、オルレアン大公が摂政となりました。かれのローに対する信頼はすこぶる厚く、かれを起用して参政官といたしました。ローは全国民に十分な通貨を供給することの必要を説き、土地を担保として紙幣を発行する銀行の設立を提唱いたしました。

この趣旨にそうてローの計画は進められました。すなわち先ず1716年5月に個人銀行 la Banque générale が設立されましたが、1718年12月には王立銀行 la Banque royale に改組されました。その（兌換銀行券の）発行高は漸次に増加いたしました。そのために金利は著しく低落して、ローの本来の意図であった貨幣の不足は解消されました。が、しかし彼の計画はここに止どまりませんでした。」（高垣寅次郎博士『インフレーションの歴史の一節』1966年1月8日、講書始めにおける講演から）

この間1717年8月にローはそれまで東・西と2つあったインド会社を統合・継承する「西方会社」を設立して、ミシシッピー植民地の開拓および通商の特許権とカナダの毛皮貿易の特許権を独占し、1719年にはそれをさらに「インド会社」に改組してフランスの貿易特権を一手に掌握することになりました。こういった彼の政策によって、多年にわたって極度に沈滞していたフランスの経済が一時的に活力を回復して、未曽有の盛況を呈するようになりました。このような状況の中で1720年1月ローは念願の財務総監、つまり大蔵大臣に任命されました。

しかし、皮肉にもローが財務総監に就任したのと時を同じくしてフランス経済は急転直下パニック状態に陥って、王立銀行には銀行券を正貨に兌換することを求める人々が大挙しておしかけましたし、他方、額面の36倍にまで高騰していたインド会社の株式も大暴落して収拾のつかない大混乱が生じました。こうしてローは同年5月に財務総監を罷免されて、年末にヴェネツィアに亡命いたしました。

その後、数年間イギリスで暮らしたこともありましたが、1727年に再びヴェネツィアに移り、そこで1729年に病没いたしました。

高垣文庫にはジョン・ローにかんする文献が50数点含まれている。

1 **Law, John**

Money and trade consider'd; with a proposal for supplying the nation with money. 2nd ed. London, Printed for W. Lewis, 1720. 2 p. l. 96p. 21cm.

ジョン・ロー『貨幣と商業』 第2版 ロンドン 1720年

ジョン・ロー（1671-1729）の最も重要な著作である。この本の初版は1705年にエディンバラで匿名で出版された。ここに展示するのは、ローがフランスの財務総監に就任した1720年にロンドンで出版されたものである。同じ年にロンドンでもう1つ別の版も刊行されている（Ⅲ2）。この後も1750年と1760年にグラスゴウで版を重ねた（Ⅲ4とⅢ5）。

2 **Law, John**

Money and trade consider'd; with a proposal for supplying the nation with money. London, Printed for W. Lewis, 1720. 106p. 21cm.

ジョン・ロー『貨幣と商業』 ロンドン 1720年

3 **Law, John**

Considerations sur le commerce et sur l'argent. Trduit de l'Anglois. La Haye, Jean Neaulme, 1720. 4 p. l., 187, [19]p. front. 16cm.

ジョン・ロー『商業と貨幣』（仏訳）ハーグ 1720年

ローの主著『貨幣と商業』のフランス語版で、かれがフランスの財務総監に就任した1720年にハーグで出版されたものである。ここにあげた英語版やフランス語版と同じ年にライプツィヒでドイツ語版も出版されたことが知られている（当研究所に復刻版がある）。これらの出版によって、その当時ローがヨーロッパ諸国にいかに大きな影響を与えたかを窺い知ることが出来よう。

4 **Law, John**

Money and trade considered: with a proposal for supplying the nation with money. First published at Edinburgh MDCCV. By the celebrated JOHN LAW, Esq; afterward Director to the Missisipi Company. Glasgow, Printed and sold by R. & A. Foulis, 1750. 226p. 16cm.

ジョン・ロー『貨幣と商業』 グラスゴウ 1750年

5 Law, John

Money and trade considered: with a proposal for supplying the nation with money. First published at Edinburgh 1705. Glasgow, Printed and sold by R. & A. Foulis, 1760. 226p. 16cm.

ジョン・ロー『貨幣と商業』 グラスゴウ　1760年

6 [M. de Sénovert]

Oeuvres de J. Law, Contrôleur-générale des Finance de France, sous le Régent ; contenant les principes sur le numéraire, le commerce, le crédit et les banques. Avec des notes. Paris, Buisson, 1790. xlix, [3], 431p. 20cm.

ドゥ・セノヴェール『ジョン・ロー著作集』 パリ　1790年 〔成城大学図書館所蔵〕

1790年、フランス革命の時期にパリで出版されたジョン・ローの著作集である。「デュ・セノヴェールによるローの著作集は見過ごすことの出来ないものである。」(Levasseur) ここに展示する本の見返しにはスイスの経済学者・社会学者 Edgar Salin の署名がある。

7 HET GROOTE TAFEREEL DER DWAASHEID, Vertoonende de opkomst, voortgang en ondergang der Actie, Bubbel en Windnegotie, in Vrankryk, Engeland, en de Nederlanden, gepleegt in den Jaare MDCCXX. Zynde een Verzameling van alle de CONDITIEN en PROJECTIEN Van de opegeregte Companien van Assurantie, Navigatie, Commercie, &c. in Nederland, zo wel die in gebruik zyn gebragt, als die door de H. Staten van eenige Provintien zyn verworpen: als meede KONST-PLAATEN, COMEDIEN en GEDIGTEN, Door verscheide Liefhebbers uytgegeeven, tot beschimpinge deezer verfoeijelyke en bedrieglyke Handel, waar door in dit Jaar, verscheide Familien en Persoonen van Hooge en Lage stand zyn geruineerd, en in haar middelen verdorven, en de opregte Negotie gestremt, zo in Vrankryk, England als Nederland, Zo lang den Gier'ge Mensch Is voorzien van geld en goed, Krygt den Bedrieger tog zyn wensch, Want bem Gier'ge Onnooz'le altyd voed.*****

HET GROOTE
TAFEREEL
DER DWAASHEID,
CONDITIEN EN PROJECTEN
KONST-PLAATEN,
COMEDIEN EN GEDIGTEN.

Gedrukt tot waarschouwinge voor de Nakomelingen, in't noodlottige Jaar, voor veel Zotte en Wyze. 〔Amsterdam ?〕 1720. 40cm.

The Great Mirror of Folly, showing the rise, progress and downfall of the bubble in stocks and windy speculation, especially in France, England and the Netherlands in the year 1720, being a collection of all the terms and proposals of the incorporated companies for insurance, nevigation, trade, &c. in the Netherlands, both those which have gone into actual operation and those which have been rejected by the legislatures in various provinces. With prints, comedies, and poems, published by various amatures, scoffing at this terrible and deceitful trade, by which various families and persons of high and low condition were ruined in this year, and possessions lost, and honest trade stopped, not only in France and England but in the Netherlands.

As long as the avaricious
Own money and property,
The deceitful man gains his end,
For the miser and the fool will always feed him.

Printed as warning to those who come after, in the ill-fated year, for many fools and wise men. 1720.

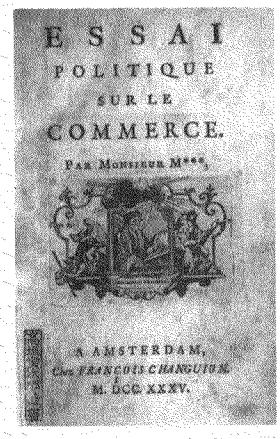
編著者不明『愚かごと絵とじ』 出版地不明 1720年

イギリスで南海の泡沫事件とよばれ、フランスではミシシッピーの泡沫事件とよばれたのと同じ事件が、同じ時期にオランダでも発生した。これらの事件をめぐって各国でおびただしい量の書物やパンフレットが生れたが、「オランダのこの本ほど強烈で突飛なものは英・仏両国では見当らなかった。この本の大半は2つ折版の1ページに印刷された（多数の）風刺画―当時オランダでばらばらに現われたもの―で占められている。本文には、その時期にオランダの諸都市で浮き沈みした諸会社の定款などが含まれている。」この本は編集者も出版地も不明であって、同じタイトル・ページをもち、同時に出版されたと思われるものであっても、どの1冊をとって見ても、本文の資料も風刺画も決して同じではない。正確に同じものは2冊とないと言われている。「1冊の本でこれほど大きな経済学的な興味と書誌学的な謎とを併せもつものは極めて稀である。」(Cole) ここに展示する本は74枚の風刺画を含んでおり、そのうちの数枚にはジョン・ローやパリのカンカンポア通りの状況が描かれている。

この本の見返しには、旧所蔵者が1952年1月2日にアムステルダムでこれを入手したさいの状況が詳しく書かれている。

8　[Melon, Jean François]

Essai politique sur le commerce, par monsieur M.***. Amsterdam, François Changuion, 1735. 7. p. 1., 251p. 16cm.



ムロン『商業政策論』　アムステルダム　1735年

著者「ムロン（1673-1738）はインド会社におけるローの秘書の一人であった。」（Daire）ロー自身が「問題の処理をムロン氏に一任した。かれが誠実な人柄であることを知っていたから、信頼して細部には口を差し挟まなかった」と述べていることからも、ムロンが深い信任を得ていたことがわかる。そこで、「ムロンはローのステムにかんして直接の知識をもっていて、この本がフランスおよび諸外国で大好評を博して顕著な影響を及ぼした。」（Schumpeter）ということが十分に納得できる。1738年にはダブリンで英語版も刊行された。

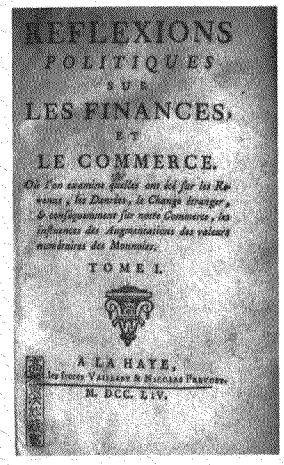
9　Melon, Jean François

Essai politique sur le commerce. Nouv. ed. augm. de sept chapitres, & où les lacunes des editions précédentes sont remplies. [n. p.] 1736. 2 p. 1. 399p. 17cm.

ムロン『商業政策論』　出版地　不明　1736年

10　[Dutot, Charles de Ferrare]

Reflexions politiques sur les finances, et le commerce. Où l'on examine quelles ont été sur les revenus, les denrées, le change étranger, & conséquement sur notre commerce, les influences des augmentations des valeurs numéraires de monnoies. La Haye, Vailliant & Nicolas Prevost, 1754. 2v. fold. tabled. 17cm.



デュト『財政と商業に関する政治的省察』　ハーグ　1754年

著者「デュトはローの時代のインド会社の出納官で、ローのシステムに最も精通し独自の見解をもった解説者である。」（Daire）この本ははじめ1735年に『商業政策論』（Ⅲ8とⅢ9）の著者ムロンにあてた3通の書簡の形で書かれて1736年には完成していたが、出版されたの

は1738年で、1743年に再版された。ここに展示したのはそれの1754年版である。1739年にはロンドンで英訳本も出版されている。

この本はローのシステムとその崩壊の理由について好意的な検証を示しており、また17世紀後半と18世紀前半のフランスの経済生活を知るための貴重な資料とされている。「この著書は賞賛に値するほどに明晰で、また難解な財政の学問を研究しようとするものは誰でも一読せずにはすまされないほどの影響力を秘めている。」(Blanqui)

このカタログにも挙げたローの敵対者パリ・デュヴェルネの著書『財政と商業に関する政治的省察と題する本の検討』(Ⅲ12) はデュトのこの本に反論を加えるために書かれたものである。

11 Du Hautchamp, Berthlémi Marmont

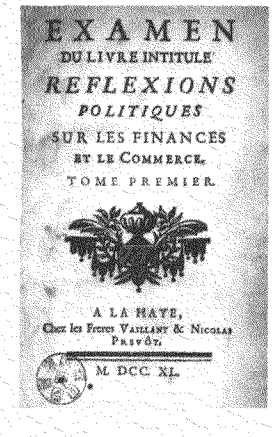
Histoire du système des finances, sous la minorité de Louis XV, pendant les anneés 1719 & 1720. Précedée d'un abregé de la vie du Duc Regent & du Sr. Law. La Haye, Pierre de Hondt, 1739. 6v. 17cm.

デュ・オーシャン『財政制度の歴史』 ハーグ 1739年

著者デュ・オーシャンはジョン・ローの政策を取り上げた同時代の歴史家で、ローの称賛者である。この本はローの死後10年目に刊行されたもので、「現存する最も貴重な資料である。」(Levasseur) 本書の第5巻と第6巻にはローの「システム」にかんする多数の採決、覚え書き、特許状などのテキストが含まれている。

12 [Dechamps, F. M. C. et Pâris Duvernay, Joseph]

Exammen du livre intitlé Reflexions politiques sur les financs et commerce. La Haye, Vaillant & Nicolas Prevôt, 1740. 2v. 17cm.


EXAMEN
DU LIVRE INTITULÉ
REFLEXIONS
POLITIQUES
SUR LES FINANCES
ET LE COMMERCE.
TOME PREMIER.
A LA HAYE,
Chez les Freres VAILLANT & NICOLAS PREVÔT.
M. DCC. XL.

パリ・デュヴェルネ『財政と商業に関する政治的省察と題する本の検討』 ハーグ 1740年 〔成城大学図書館所蔵〕

著者として名を連ねているパリ・デュヴェルネは当時の有力な金融家＝いわば高利貸であったパリ兄弟の一人で、ルイ14世の時代から国王の資金調達の需要に応じていた。多年にわたってローと鋭く対立し、当時『システム』とよばれていたローの政策に対抗して『アンチ・システム』会社を設立してついにローを没落に追い込んだ。1721年パリ・デュヴェルネは『査問委員会 Visa』の長になってロー失脚後のフランスの財政の整理にあたった。1723年から1726年までの間、財務総監ドダンのもとで事

実上フランス王国の財政を取り仕切ったと言われている。

この本は、ローのシステムにたいして好意的な立場をとるデュトの著書（Ⅲ10）に反論を加える目的で出版されたものである。

13 [Paterson William]

Proposals and reasons for constituting a council of trade in Scottland. By the celebrated John Law, Esq. [pseud.] First published at Edinburugh in the 1700. In which many national improvement of great importance are pointed out.... Glasgow, Printed and sold by R. & A. Foulis, 1751. xx, 282p. 16cm.

パタースン『貿易委員会設置の提案』 グラスゴウ　1751年

この本ははじめ1701年にエディンバラで匿名で出版された。当時の土地銀行の思潮にかんする貴重な文献である。ここで展示するのは1751年にグラスゴウで再版されたものである。これらは長い間ジョン・ローの著作と考えられていたが、現在は1694年のイングランド銀行創立に関わったウィリァム・パタースンの著作であるとされている。

14 [Wood, John Philip]

A sketch of the life and projects of John Law of Lauriston, comptroller general of the finances in France. Edinburgh, Printed for Peter Hill, 1791. 2 p. l., ii, 48p. 29cm.

ウッド『ジョン・ローの生涯と事業の大要』 エディンバラ　1791年

15 [Wood, John Philip]

The antient and modern state of the parish of Cramond. To which are added, biographical and genealogical collections, respecting some of the most considerable families and individuals connected with that district ; comprehending a sketch of the life and projects of John Law of Lauriston. Edinburgh, Printed by John Paterson, 1794. vii, [1], 291p. illus. 28cm.

ウッド『クラモンド教区の今昔　付　ジョン・ローの生涯と事業の大要』 エディンバラ　1794年

16 [Wood, John Philip]

Memoirs of the life of John Law of Lauriston, including detailed account of the rise, progress, and termination of the Mississippi system. Edinburgh, Printed for Adam Black, 1824. 3p. l., 234p. front. (port.) 18cm.

ウッド『ジョン・ローの生涯にかんする覚え書き』 エディンバラ　1824年

17 Lémontey, [Pierre Edouard]

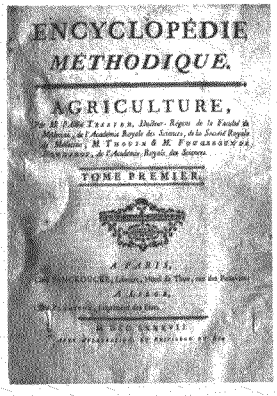
Histoire de la Régence et de la minorité de Louis XV jusqu'au ministère du Cardinal de Fleury. Paris, 1832. 2v. 21cm.

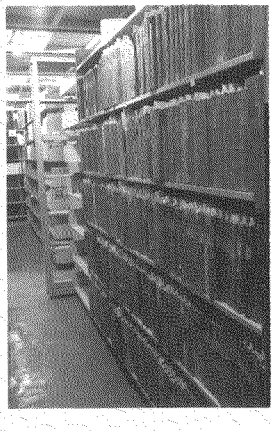
ルモンテイ『摂政と幼王ルイ15世から宰相フルーリ枢機卿までの歴史』 パリ 1832年

Ⅳ　フランス政治経済社会史
特殊コレクション

1 **Encyclopédie** Méthodique. Paris, 1782–1832. 40 Division, Discours 158 tomes (277 vols) et Planches 50 tomes (54 vols). 27cm.

『体系百科全書』 全208巻（331分冊） パリ 1782–1832年 〔成城大学図書館所蔵〕


ENCYCLOPÉDIE
MÉTHODIQUE.
AGRICULTURE,
TOME PREMIER.



本書『体系百科全書』は著名なディドロ編『百科全書』の増補改訂版として出版業者シャルル＝ジョセフ・パンクーク Charles-Joseph Panckoucke によって企画・出版された。しかし、ディドロ版を批判し、事項順による編成方式をとり、また、諸学・諸技術ごとの各部門辞典を作成し、その集成としての百科全書という構成をとった。「人間知識の完全な蔵庫」をめざす本全書は、ディドロ版で欠落した項目を補塡し新部門辞典を追加し、増補改訂版の性格と枠組みをこえ、当初予定の本論53巻図版７巻を大巾に変更、拡大された。内容はより専門的であり、それだけ史料的価値は高い。また、フランス革命を体験する百科全書派第二世代の発想を知るためにも貴重な史料である。後半の出版事情が混乱し、総巻数は各所蔵本で異なるが、書誌学者グレスの算定した本論166$\frac{1}{2}$巻、図版51巻（総計337分冊）が最も正確といわれる。本学所蔵本は大部分が配本時の仮綴じ本である。

2 **Delamare, Nicolas**

Traité de la police, où l'on trouvera l'hitstoire de son etablissement, les fonctions et les prerogatives de ses magistrats, toutes les loix et tous les regiments qui la concernent. 2 éd. augm. Amsterdam, 1729. 4v. 42cm.

ニコラ・ドラマール『治安警察概要』 全４巻 第２版 アムステルダム 1729年 〔成城大学図書館所蔵〕

パリ・シャトレー裁判所付警視であったドラマール（1639–1723）がパリ高等法院長や財務卿コルベールの依頼をうけ、パリ市の治安状況を精細に調査した概要である。17・18世紀パリの習俗、公衆衛生、食糧流通、交通事情、生活環境など社会史研究の最も貴重な史料の一つである。初版は1705年パリで刊行されたが、成城大学図書館所蔵本はその第二版である。

3 Freminville, Edme de la poix de

Dictionnaire ou traite de la police générale des villes, bourgs, paroisses et seigneuries de la campagne. Paris, 1778. xii, 705p. 20cm.

フルマンヴィル『市町村並びに所領に関する治安警察辞典』 パリ　1775年 〔成城大学図書館所蔵〕

地方の治安関係役人であった著者は、17、18世紀パリの治安についての精細な概要であるドラマールの Traité de la police が地方では全く入手できない事情から、それに代る裁判・治安・財務・市政関係の実務者のためのマニュアルを作成した。その便宜をはかり辞典方式とした。とくに治安関係法令、規則の抜粋や要約をふくみ、社会史研究の史料としての価値がある。初版本は1771年である。

4 Gazette nationale ou Le moniteur universel. Paris, 〔1789. 5. 5～1812. 12. 31〕 49v. 50cm.

『モニトゥール・ユニヴェルセル』紙　全49巻　パリ　1789年5月5日－1812年12月31日

出版業者パンクークによって発行されたフランスの新聞。1789年5月5日、全国三部会の召集を機に編集されたが、同年11月24日から本格的な日刊新聞として創刊された。革命期を経て1799年12月28日いらい事実上の政府公報に変り、1869年1月、正式の『政府公報』が発行されて以後は、保守系新聞として1901年6月30日まで続刊した。この経済研究所所蔵本は、2折大判というフランス最初の近代新聞の判型で刊行されたオリジナルである。1789年5月5日分から1812年12月31日分までを収納する。

5 Courtilz, Gatien de, sieur de Sandras

Testament politique de messire Jean Baptiste Colbert, ministre et secrétaire d'Etat, Où l'on voit tout ce qui s'est passé sous le regne de Louis Le Grand jusqu'en l'année 1684. Avec des remarques sur le Gouvernement de Royaume. La Haye, Henry van Bulderen, 1693. 16p. l., 501p. 16cm.

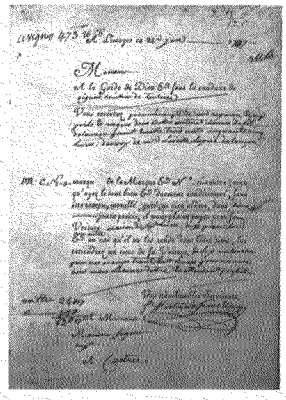
クルティール編『コルベール政治遺書』 初版　ハーグ　1693年

コルベールの政治遺書。絶対王政期の国王や宰相はしばしば国政に関する意見を政治遺書としてまとめ、後世の統治への指針を示している。ルイ14世の財務卿であったコルベールの政治遺書は原本が喪失しこのクルティール版によってのみその全貌を知ることが出来る。

6 **Recueil** des actes affichés, 1666-1788——Conjoncture economique sous l'Ancien Régime, 125 items.

アンシァン・レジーム期の法令の貼り札　125点　1666-1788年〔成城大学図書館所蔵〕

1666年10月7日付、国務院登録簿の抜粋——コルベールの命令の布告——から1788年3月8日、土曜日の競売の公示まで123年間にわたる125点の貼り札の束である。「国務院の決定」や「高等法院の決定」が数多く含まれている。その外に、1776年から1790年までの商業文書——積荷関係、保険関係など——が26点見られる。アンシァン・レジーム期の状況を知る上で貴重な資料である。



7 **Assignats** et promesses de mandats territoriaux.

アシニャとマンダ・テリトリオー　10点　1792-1796年〔成城大学図書館所蔵〕

1789年の12月、フランス政府は国民議会の決定に基いて、貴族や寺院から没収した土地を処分して得られるはずの財政収入を引き当てにして額面1万リーブル、5分

利付きの債券を総額4億リーブル発行した。これは国有地の購入などのさいに政府に対する支払いに充てることは出来たが、強制通用力を備えてはいなかった。しかし翌年4月に発行された第2回アシニャは5分利付き、総額4億リーブル、額面は200、300および1000リーブルで強制通用力を与えられた。さらに同年9月に発行された第3回アシニャは無利子とされ、その後、それまでに発行済みのアシニャも無利子とされたので、アシニャの貨幣としての性格が鮮明になった。こののちアシニャの発行高は急激に増大し、鋳貨に対するその価値は低落の一途をたどった。

このような貨幣制度の混乱を建て直すために、1796年3月マンダ・テリトリオー：土地手形という強制通用力をもった新紙幣を発行して、1マンダ対30アシニャの比率で引き替え、マンダの所有者に対しては一定の価格で土地を取得する権利が与えられるものとされた。しかし実際に発行されたのはマンダそのものではなく、マンダとの引き替えを約束する証書 promesses de mandats territoriaux であった。やがてこの紙幣も増発を重ねてアシニャと同様の運命をたどった。これらはいずれも土地貨幣のアイデアから出たものである。

ここに展示するのはアシニャ9点とマンダ・テリトリオー1点である。

8　Recueil des tracts sur l'Assignat, 1789-1804, 154 items.

アシニャに関する同時代のパンフレット　154点　1789-1804年　〔成城大学図書館所蔵〕

1789年2月9日付、国王あてのカロンヌの手紙〔No. 52〕、9月11日付、大蔵大臣ネッカーから国民議会議長あての手紙〔No. 53〕、同じく9月18日付、国王から国民議会あての手紙〔No. 54〕などから1804年に出版された小冊子まで、16年間にわたるパンフレット154点の束である。

これは、当文庫が所蔵するイギリスの金融関係文献 Tracts on finance & commerce ——18世紀末から19世紀初めにかけてのパンフレット108点を19冊に合冊したもの〔Ⅱ 36〕——に比すべき重要な文献で、アシニャを研究するための貴重な資料である。

故高垣寅次郎博士略歴

明治23年(1890) 2月26日	広島県尾道市に生まれる
大正 2年(1913) 7月 7日	東京高等商業学校専攻部銀行科卒業
4年(1915) 4月13日	東京高等商業学校助教授
5年(1916) 8月	商業学研究のための満三ケ年間米国へ留学のため出発
5年(1916)10月25日	東京高等商業学校教授
9年(1920) 4月 1日	東京商科大学助教授、東京商科大学附属商学専門部教授
13年(1924) 6月 7日	東京商科大学教授
15年(1926) 4月20日	経済学博士
11月29日	東京商科大学附属図書館長
昭和 9年(1934)11月26日	文部省視学委員
10年(1935) 5月26日	教員検定委員会臨時委員
11年(1936) 5月 9日	願いにより退官
13年(1938) 4月	外務省嘱託（通商局顧問）
19年(1944) 3月24日	拓殖大学教授兼学監
20年(1945)10月 1日	金融制度調査会委員
21年(1946) 4月 1日	紅陵（現拓殖）大学長（昭和27年4月23まで）
22年(1947) 3月	戦後通貨対策委員会委員
24年(1949) 1月20日	日本学術会議会員（昭和41年1月19日まで）
10月 5日	日本学士院会員（昭和60年8月25日まで）
25年(1950)12月	金融学会会長（昭和57年5月2日まで）
26年(1951)12月 3日	一橋大学名誉教授
27年(1952) 9月 6日	日本学術振興会理事長（昭和43年4月30日まで）
28年(1953) 4月	成城大学顧問
5月	三菱銀行取締役
29年(1954) 4月	成城大学で「貨幣論」講義担当（昭和36年3月まで）
32年(1957) 5月	日本経済学会連合理事長（昭和39年まで）
34年(1959) 9月 4日	科学技術会議専門委員
37年(1962) 1月 1日	成城学園学園長・常務理事（昭和44年12月31まで）
	成城大学学長（昭和45年12月31日まで）
38年(1963)10月15日	大学設置審議会委員（昭和45年4月30日まで）
39年(1964)10月 6日	第13回ユネスコ総会日本政府代表（昭和39年11月27日まで）
40年(1965) 8月 1日	日本ユネスコ国内委員会会長（昭和43年7月31日まで）
41年(1966) 1月 8日	宮中講書始において講演
41年(1966) 5月18日	㈶東洋文庫理事（昭和60年6月4日まで）
42年(1967) 4月	成城大学大学院講義担当（昭和59年3月まで）

43年(1968) 8月1日	日本ユネスコ国内委員会名誉会長
44年(1969)10月	臨時大学問題審議会委員（昭和48年10月まで）
46年(1971) 1月1日	成城学園名誉学園長（昭和60年8月25日まで）
4月28日	㈶ユネスコ・アジア文化センター理事長（昭和47年3月31日まで）
47年(1972) 4月1日	㈶ユネスコ・アジア文化センター会長（昭和58年5月28日まで）
51年(1976) 4月29日	勲1等瑞宝賞
58年(1983) 5月29日	㈶ユネスコ・アジア文化センター名誉会長（昭和60年8月25日まで）
60年(1985) 8月25日	逝　去　祭祀料を下賜さる
同　　日	従三位に叙せらる

編 集 後 記

1983年に当研究所の前身である成城大学高垣文庫は、『高垣文庫貴重書目録』を刊行した。その後、私共は高垣コレクションをさらにわかりやすい形で紹介したいと考えていたが、今回、高垣寅次郎博士生誕100周年記念事業の一環として、主要な貴重書を展示し、展示目録を刊行する機会を得た。当研究所としては、この種の事業ははじめてなので、図書の選定から目録刊行まで1年がかりの作業となった。

この目録の解説執筆分担は以下の通りである。

Ⅰ 経済思想史上の古典……木村周市朗（当研究所所員、成城大学経済学部教授）

Ⅱ イギリス地金論争……中西充子（城西大学経済学部教授）

Ⅲ ジョン・ロー関連文献……中村英雄（当研究所所長　成城大学経済学部教授）

Ⅳ フランス政治経済社会史特殊コレクション……千葉治男（当研究所所員、成城大学文芸学部教授）

中西教授は、当研究所所員ではないが、通貨論争についての本邦における権威であると同時に、高垣博士の愛弟子でもあるので、とくに執筆をお願いした次第である。

この目録の編集には主として木村所員が当ったが、職責上私が編集後記を記すことを付記しておきたい。

（浅　井　良　夫）

高垣文庫所蔵貴重書展示会目録

平成3年3月20日　印刷
平成3年3月25日　発行

発　行　成城大学経済研究所
〒157　東京都世田谷区成城6-1-20
電　話 03（3482）1181番
印刷所　白陽舎印刷工業株式会社